

自由時間

VOL.5

旧東ドイツの都市を巡る旅

一過去と向き合うということー

吉澤 エミ

身近にあった通信性中学

草場 弘子

■寄稿欄 ■ 地球一周船の旅

大井 和子

あきる野ものがたり

町田 輝子

■寄稿欄 ■ 韓国熱

中野 恵子

茶遊へようこそ！ソウルの女性たち

—交流でつなぐ日本と韓国—

吉澤 エミ

◆映画紹介◆ 「花の夢」

◆農園便り◆ 今年の枝豆は 面白い勉強

イギリス妊婦体験

原 和美



「自由時間」……

なんだかウキウキ、ワクワクしてきます。学生時代、何ら制約のない「自由時間」は最ももれしかつた時のひとつ。

一〇年ほど前から立川の女性たちの聞き書きをしながら、「つむぐ」という冊子を編んできました。養蚕や織りで毎日を紡いでいた祖母たちの暮らし、砂川闘争の中で人間として急成長していく女性たちの姿、占領下の女性たちの光と影など、私たちが「縁」を持った立川で女性がどんなふうに歩み、何を感じてきたか、「聞き書き」を通して見つめなおしてきました。一〇〇一年三月に発刊した「つむぐ」一〇号「立川の女性たちの近・現代の歩み」をこれまでの私たちの活動のまとめとし、これからはそれぞれがそれぞれの「自由時間」を楽しく書いていきたいとの小冊子「自由時間」を創刊いたしました。

日々の暮らしの中で疑問に思っている事、各自の生活の中での思いや紀行文など、皆さまへの「お便り」のように綴っていきたいと思っています。

人生の自由時間、ひと仕事終えた後の自由なひととき——私たちの「自由時間」にいくばくかの風を感じていただけたらと感じています。

一〇〇二年九月

「つむぐ」の会

旧東ドイツの都市を巡る旅 —過去と現在を並べて—

日曜　11/11



ベルリン・夜のブランドンブルグ門

I 今、旧東ドイツに「だわる理由

はじめてドイツを訪れたのは十五年前、ドイツ南西部の大学町チュービングンで友人に会うという目的のためであつた。往きはフランクフルトから列車を利用、帰りは友人が運転する車でアウトバーンを走り、ハイデルベルグや古城など見所の要所、要所を観光してまわるというものだった。だが、その時の印象は薄く、ドイツはその後再び旅の候補にのぼることとはなかつた。

なのになぜ、十五年を経た今、突然ドイツへの旅を思い立つたのか。それにはいくつかの理由があつた。

昨年、同人誌『自由時間・4号』に「2006・サッカーワールドカップ観戦記」という拙文を載せた。内容はサッカーを手がかりに、日独の第二次大戦に対する戦後処理について、ベルリンをはじめ、ニューヨーク、ベルグ、ワイマール、ポツダムなどの地名を上げ、ナチの台頭と第二次大戦の終焉、そして戦後の歩みを縷々綴つたものだった。

しかし、それは観念的でリアリティに乏しく、実感の伴わない空疎なものでしかなかつた。いかに論理に正当性があつたとしても、それだけでは人には受け入れられにくい。そんな反省の気持ちがいつか、ベルリンやワイマール、ポツダムの地に立つてみたいという願望に変わつていった。

今年の一月沖縄宮古島に出かけた。ただひたすら青いサンゴの海と、おだやかな南の島の風光に浸るだけのために。だが、そこで見たものは、思いもかけない衝撃的な光景であった。宮古島上野村の観光施設ドイツ文化村に、東西ドイツの分断のシンボルである壁の一部（1.2メートル幅、3.6メートル高さ）が、展示されていたのである。

なぜ宮古島にベルリンの壁が？といぶかる私。それには次のような訳があったのだった。一八七三年（明治六）、ドイツの商船が中国からオーストラリアに向けて航海中、台風に遭い上野宮岡沖のリーフに座礁難破、それを村人が発見、助けた縁によるものだと、いう。

その後も続く交流の縁により、ベルリンの壁が崩壊した際ブランデンブルク門前の無傷の壁の中から、特別に選んで取り寄せたものだという。その小ぶりの壁の前に立ち、忘れかけていた十八年前のある出来事を思い出していた。

一九八九年一月十日未明、我が家に一本の電話が入った。当時西ベルリンに住んでいた韓国人のKさんからである。Kさんは当時ベルリン自由大学で社会学を専攻し、助手を務めていた。電話からはKさんの興奮した声が伝わってくる。何か大変なことが起こっているらしい。Kさんの話の内容とは次のようなものであった。「今、ベルリンは東西の分断の壁が破壊され、ブランデンブルク門のあたりから西と東の人たちが壁を乗り越えて往き来し、抱き合い、歓喜、感涙にむせび興奮の渦にある」と。

かつてベルリンを西と東に分断していたこの壁は、西ベルリンを東ドイツという国家か

ら孤立させるものであった。そういえば一九六一年、八月一三日壁が築かれた当時、西ベルリンへの交通網は遮断され、食料や日常生活に必要な品々が西ドイツから西ベルリンに空輸されているのをよくニュースで見ていたような気がする。

突然の壁の構築によるベルリン封鎖から二八年、この壁をめぐつてこれまでどれだけ多くの血が流されたことか。Kさんは韓国のお州出身。光州事件を経験した民主化運動世代である。彼は東西ドイツの壁が崩壊していく様を目の当たりにし、朝鮮半島の現状と未来に思いを馳せていたのではないだろうか。

彼はその翌年の一九九〇年、統一ドイツの瞬間を見届け、ベルリンを去り、祖国韓国に戻った。我が家には十七年前、帰国の際に彼から譲られたベルリンの壁の破片がある。

私は富古島のベルリンの壁の前で、Kさんのことを考えながらつぶやいていた。“よし、ベルリンへ行こう”と。

旧東ドイツ地域をまわる計画を思いつき、旅に向けての細かいプランを練り始めた頃の六月二十四日、私のマネジメントするギャラリーで、ドキュメンタリー映画の上映会を開いた。作品は歌舞伎の『勘定帳』と森鷗外の居宅であった文京区の観潮楼（現、森鷗外記念室）を中心に明治の文豪たちの交流を描いた『文きようゆかりの文人たち』の二作品。監督やカメラマン、鷗外記念室の室長を招き、映画製作に関わったスタッフ、フルメンバー

の出席を得ての上映会だった。

映画は明治の文豪をはるか遠い時代の名作の中に閉じ込めるのではなく、よき家庭人、あるいは悩める市井人としての面も描き、分り易く、共感の沸く作品であった。その鷗外は二十代前半の若き日の四年あまりを、軍医学の研究のためにドイツに留学する。六十年の生涯でもっとも多感で、夢多き時期に受けた西洋での異文化体験、それはどんなものだったのか、その後の鷗外にどんな影響を与えたのか、興味はつきることなく膨らんでいく。こうして旧東ドイツをめぐる旅にもう一つの目的が加わることになった。

II 鉄道で往くゲーテ街道

フランクフルトからベルリンへ向かうコースは通称ゲーテ街道といわれ、ゲーテをはじめ、シラー、ルター、バッハその他の多くの哲学者、宗教者、音楽家を輩出した地方である。私たち夫婦はこのコースをフランクフルトを起点に、アイゼナハ、ワイマール、ライプチヒ、ドレスデン、ベルリンの都市を列車でまわる計画を立てた。

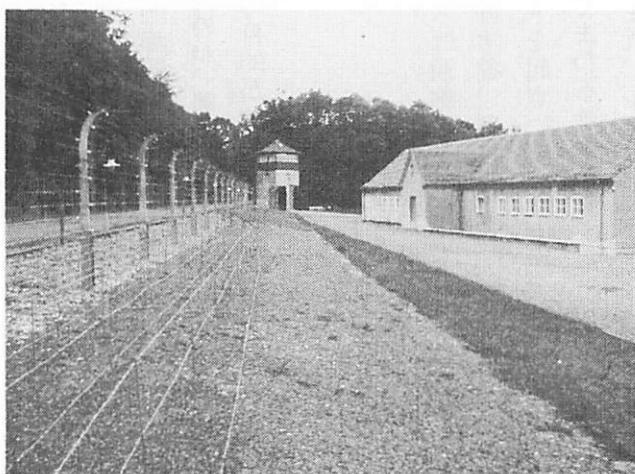
最初に訪れたのはアイゼナハ。バッハが生まれ、ルターが迫害から逃れ、新約聖書をドイツ語に訳すために、ひそかに匿われた土地である。グリム童話に出てくるような幻想的な佇まいの街をあとに、次に向かったのはワイマール。

ワイマールは人口六万の小さな都市。ここは『ワイマール憲法』の発祥の地としてよく知られるところだ。

一九一九年、民主的で近代的な憲法が制定され、ドイツで最初の共和国が誕生する。しかしこれまで君主制に慣れ、封建的な諸制度を当たり前のこととして受け止めて

きた国民の意識は成熟しておらず、その後、深刻な経済恐慌が起こると、不安におびえた国民は巧みな誘導作戦にのってヒットラー率いるナチスの台頭を許してしまうのである。

ワイマールの中心部から北西へ十キロ、自然豊かな森の中にナチスの強制収容所ブーヘンヴァルト記念館がある。一九三九年（一九四五年まで三二カ国から二五万人が集められ、そのうち六万五千人以上が強制労働や飢え、処刑により命を絶たれてい



ワイマール郊外・ブーヘンヴァルト強制収容所跡

る。森の一角の荒涼とした跡地にはガス室、拷問部屋が残され、ユダヤ人が虐殺の生々しい傷跡を今に伝えている。

ワイマールの街の中心にワイマール憲法を採択した場所“国民劇場”がある。現在でもオペラや演劇、コンサートが開かれ、ドイツの有名な芸術家たちが集まつてくる。劇場の広場の前にはゲーテとシラーの銅像が立ち、この町の芸術と政治の織り成す歴史の移ろいを見続けているようだ。

ワイマールを後にドレスデンに向かう途中、ライプチヒに途中下車する。ライプチヒは人口四十四万の大都市。バッハをはじめ、シューマン、リスト、ワーグナーなど偉大な音楽家が業績を残したところとして知られる。また岩波文庫がお手本にした出版社もあるドイツ屈指の学芸の町としても有名だ。しかし私たちの興味はバッハでもシューマンでもない。明治の文豪、森鷗外である。

III 森 鷗外ゆかりの地にて ——ライピチヒとドレスデン—

鷗外こと森林太郎は一八八四年十月二二日から一八八五年十月十日までの一年間、軍陣衛生学を学ぶために、ライプチヒに滞在する。鷗外の『独逸日記』によると、この間鷗外は一七〇余冊の洋書を読み、更に『日本兵食論』や『日本家屋論』の著述も行っている。

観劇やビアホールに通い、デーベン城に出入りし、青春を謳歌する。この経験は後にドイツ三部作の一つ『文づかひ』に結実する。ライブチヒで最初に訪ねた所は鷗外の学びの場、ライブチヒ大学。

ライブチヒ大学の構内は閑散として人影はなく、医学部の校舎の高くそびえる塔だけが鷗外の時代を偲ばせている。構内を通りかかった学生に鷗外のことを尋ねたところ、名前は聞いたことがあるが、詳しいことは知らないとのこと。ナチの時代を過ぎ、東西ドイツの分断と統一を経験した今、はるか遠い時代の異国の留学生を若者が知らないのは当然のことかもしれない。

鷗外とゲーテも通つたという酒場に立ち寄つた後に、思いもかけない出会いがあつた。それは東ドイツの民主化運動がはじめて起こり、東西ドイツ統一に道を開いたとされるニコライ教会を見学した後に訪れた、トーマス教会前の広場でのことだつた。トーマス教会はバッハが人生の後半をオルガニスト兼指揮者として過ごした場所で、観光客も大勢訪れる有名観光スポットである。

そこでひとりの若い外国人に「写真を撮つてください」と日本語で声を掛けられたのである。私たち夫婦が日本語を聞くのは何日ぶりだろう。思わずなつかしさも手伝つて「どちらからですか?」と問い合わせたところ、彼は国籍はトルコ、現在は四国の愛媛大学・大学院で鷗外の研究をしているのだという。ドイツではその鷗外の三部作『舞姫』『文づかひ』

『うたかたの記』などの跡を訪ねて、まずベルリンへ行き、この後ミュンヘンに向かうというのだ。トルコ人が日本で日本作家の研究をし、ドイツに足を運ぶ、この構図の面白さもさることながら、あまりの出来すぎる出会いに思わず心も弾み、思いはベルリンとはやるのだった。

チェコ国境に最も近く、クリスマスシーズンには観光客であふれかえるというドレスデン。ここは人口四七万の大都市。十六世紀以降ザクセン王国の首都として栄えた街である。バロック様式の壮麗な建物が旧市街に建ち並ぶこのドレスデンも、森鷗外と深いかかわりのある土地である。

鷗外は一八八五年十月十一日から一八八六年三月七日までの五ヶ月間、このドレスデンで軍医監ロートに指示し、軍陣衛生学を学ぶ。ロートの信任の厚かった鷗外は、一八八六年（明治十九）一月、ザクセン王宮の新年祝賀会に列席し、アルベルト国王に拝謁する。

上流階級との交流が深まり、宮中舞踏会にも出席。そこでライプチヒのデーベン城主の娘、イイダ姫に再会する。小説『文づかひ』の構想がこうした背景の中から生まれていった。鷗外の華やかな異国での青春の日々を彩つたドレスデン宮殿、ツヴィンガー宮殿、ピルニッツ宮殿、オペラハウスはエルベ川を映す夕暮れの風景に重厚さを際立たせていた。一方で“エルべのフィレンツェ”といわれるほど美しい王朝の街、ドレスデンは第一次

大戦で一夜にして破壊され、多くの人も建物も戦火の犠牲となつた。復興もまだ道半ばである。煤で灰色によじれたパロックの建物は、かつてのザクセン王朝の栄華と戦争のおろかさを同時に今に伝えている。

鷗外の時代をまだ色濃く残すドレスデンを後に、いよいよ旅の最終地ベルリンをめざす。

IV 歴史を映す都市ベルリンにて

(1) ポツダム広場から

一八七一年、プロイセン帝国の建国以来、首都としてその時々の歴史の波に翻弄され続けてきたベルリン。東西ドイツの分断から四一年、壁の構築から二八年、壁の崩壊と統一から十七年、そして統一ドイツの首都として返り咲いて八年、ドイツの興亡をそのまま映し出しているこの三百五十万人都市ベルリンは、今回の旅で私たちがもつとも大きな関心を抱いていた場所でもある。

私たちがベルリン滞在の観光の拠点としたのは旧西地区のポツダム広場にあるホテルマリオット。九月十五日、ドレスデンからベルリンに入った日の午後、ホテルのロビーで待ち合わせをする。相手はベルリン森鷗外記念館副館長のベアテ・ヴォンデさん。文京区森鷗外記念室の室長である下條さんに紹介されてメール交換して二ヶ月、名前と経歴以外、

顔も姿形も年齢も一切わからぬまま、この日の初顔合わせである。

予定の時間が過ぎると二十分、緊張して待っていた私たちの前に颯爽と現れたのは、大柄で金髪の明るくパワフルな雰囲気のひとりの女性。一目でベアテさんと分った。ベアテさんは一九七一年十月から一九八三年三月まで早稲田大学演劇科に留学している。日本語が堪能であるばかりか、歌舞伎、能、茶道など日本の伝統文化にも明るい方である。

「さあ！今日は遅くなりますよ。覚悟して！」のベアテさんの掛け声で、ベルリンの街へ繰り出したのが午後三時三十分、その後ベアテさんの案内でベルリン市内をまわりホテルに戻つたのが十時三十分。なんと二十か所のポイントを七時間にもわたつてベルリンの市内を歩き回つたのだ。

森鷗外に関する場所ばかりでなく、そのほかのドイツ近現代史に登場する場所も含め、二十か所ものチェックポイントをまわつたということは、ベルリンのポツダム、ミッテ地区をほとんど歩きつくしたことになる。元気そのもののベアテさんに比べ、十時三十分、ホテルに戻つた私はあまりの強行軍に足はつれ、息を切らしその場へたり込んでしまつたのだった。

(2) 鷗外のベルリン

ベルリンの中心は大まかに旧西ドイツのポツダム広場と旧東ドイツのミッテ地区である。

森鷗外に関連するものはほとんどがミッテ地区に集中している。ベアテさんの案内でまずポツダム広場に向かう。そこは東西分断の壁があった場所で、無人地帯だったところ。統一後、ソニーセンター、ハイテクビル、アート博物館など時代の先端を行く建物が次々とつくられている所だ。

ソニーセンターの一角に鷗外の頃と場所も店名も同じカフェがある。その名は「ヨスティ」。鷗外もよく通ったという。今は外から見る限り、最新のおしゃれなカフェで往時を偲ぶ面影はどこにもない。

ドイツで最も美しいとされるジャンダルメン広場は一九八九年、篠田正浩監督、郷ひろみ主演の日本映画『舞姫』の撮影現場となつたところだ。残念なことに映画は観ていないが、撮影現場と知つて何かなつかしい気分にとらわれる。

次に向かつたのはフンボルト大学。フンボルト大学はベアテさんが日本語学科で学び、ヘーゲル、マルクス、ainschutain、そして鷗外など錚々たる歴史上の著名人が学んだ所。古い歴史を持つ大学である。

フンボルト大学の向かい側はベル広場。ユダヤ人迫害が本格化した一九三三年五月十日、ユダヤ教の聖書や書籍二万冊が市民の手によつて、焚書された場所だ。その記憶をとどめ後世に伝えるために、地下に「沈められた書庫」と題した記念碑があり、道路からガラス越しに見る四角形の箱の中は「無」空っぽである。

この他にもユダヤ人殺害や迫害にまつわる碑やモニュメントは、ベルリン中至るところにあり、過去の歴史を直視せざるを得ない状況や環境が作り出されている。

例えば、ナチス時代犠牲になつた人の名前をプレートにして道路にはめ込んだり、最近では戦後六十年を記念して二〇〇五年五月、ブランデンブルグ門のすぐ近く、ベルリンの一等地にホロコースト犠牲者追悼碑が建設された。一万九千平方メートルの敷地に二千七百個の黒いコンクリートの群れが並ぶ。なんとも異様な光景だ。ここはまたナチ時代のゲシュタポ（秘密警察）や総統の官邸の近くでもある。

ミッテ地区の一角にユダヤ人街がある。かつては裕福なユダヤ人が住み、文化サロンを主宰、多くの文化人や学者、芸術家が集り歌会を催していた。自由な談論風発の気風は多くの文化の土壤をつくり、有能な人材が育つていった。鷗外もまたそこに出入りし、多くの影響を受けている。

帰国後、作家としての地歩が固まり、文壇の地位が揺るぎないものとなつた頃の居宅「觀潮樓」に当時の著名な歌人らを招き、歌会を催していた。これはこうしたドイツでの体験が基になっているのであろう。

ベアテさんは言う。ユダヤ人を殺害したということは、単に殺された人の数や、悲惨という言葉で語るのは不十分である。それは彼らの當々と築き上げてきた文化を抹殺することであり、その影響の下、相互に高めあってきたドイツの文化をも抹殺したことになる

と。

ユダヤ人街を過ぎてマリエン教会へと向かう。鷗外のドイツ三部作の一つ『舞姫』で主人公太田豊太郎が踊り子エリスと初めて出会う場所としてよく知られている、十三世紀に建てられたベルリンで一番目に古い教会だ。

異郷での若者の出会いと別れの物語は、鷗外の実体験と重なり、鷗外帰国の際、日本まで追いかけてきた実在のドイツ女性はいったい誰なのか。世の関心を呼び、諸説紛々あるものの確定されておらず、未だ謎に包まれたままだ。

当時、日本の陸軍に所属する留学生たちは金離れがよく、エリートでお金持ちと思われていたようだ。鷗外は資産家の息子ということになっていたらしい。同じ留学生でも漱石がイギリスで受けた差別的な待遇とは雲泥の差である。

ベアテさんからそんな話を聞きながら、鷗外がベルリンで最初に住んだ下宿先（現・森鷗外記念館）を、大家である未亡人とその姪のあまりにルーズで厚かましい振る舞いに嫌気が差し、二ヶ月で引き払って移り住んだ第二、第三の下宿先を訪ねる。第二と第三の下宿先の距離はわずか数メートル。当時通勤していたプロシア近衛師団第二連隊までの距離もほぼ同じ。なぜ下宿を変えなければならなかつたのか未だに謎であると。ベルリンで過

ごした一年あまりの間、鷗外は三度下宿を代えたことになる。

鷗外の第一の下宿先に行く途中に、ミンテ地区にできた新しい観光スポットに立ち寄る。ホーフ、それは中庭のある屋敷という意味なのだそうだ。そこは昔、お金持ちが陽の当たる表側に住み、貧しい人々は中庭を挟んで、陽の射さない北側に住んでいたという。今はレストラン、ショップ、アートスポットとおしゃれで若者の憧れの場所となっている。

鷗外コース最後の場所、ベアテさんの勤務先でもあるベルリン森鷗外記念館へと歩を進める。ここはマリエン街三二番地。もと鷗外の第一の下宿先であつたシユテル未亡人宅だ

十一月、鷗外がドイツに到着した百年目を記念して設立されたものである。

当時東ドイツ時代はフンボルト大学が直接運営に当たっていた。統一後は組織やトップが替わり、存続の危機を迎えた時もあつたようだが、その間スタッフとして替わらず記念館の運営に携わり、支えてきたのはベアテさんただ一人とのこと。現在フンボルト大学



の日本語学科やベルリン市が予算負担をしてくれているが、財政的には苦しい状況にあるという。

記念室はアパートビルの二階にあり、鷗外の居室、日本の生活用品や鷗外、娘森茉莉の書簡が飾つてある畳敷きの間、図書室、展示ホールなどからなっている。居室スペースには鷗外が暮らした十九世紀の調度品が集められ、ドイツでの下宿部屋が再現されていた。

森鷗外の六十年の生涯（一八六一～一九二二）は日本の近代化の軌跡とほぼ重なり合う。長年の夢がかなつて得た留学生活で、鷗外は四百冊もの洋書を読み、医学に関する著作も著す。多くのドイツの知的階級、上流階級との交流は二十代前半の意欲あふれた若者に多くの知的刺激を与えたはずである。日本社会のさまざまな桎梏から解放された鷗外が、西欧の思想、“自由と美”の追求に突き進んでいくのは必然の成り行きだったのだろう。軍といいう官界に身を置いた鷗外は、精神の自由と美を文学の世界に求め、次々と名作を生み出していく。

ドイツ三部作『舞姫』『うたかたの記』『文づかひ』はまさにドイツでの体験がベースになり、結実したものであった。官界にあって生涯求め続けた自由への渴望はとどまることがなく、死を目前にして個へと収斂されていく。親友の賀古鶴所に宛てた遺言書にこう記す。

「余は石見人 森 林太郎として死せんと欲す。墓は森 林太郎の外一字も彫るべからず」と。

(3) ベルリンの壁を前にして

ベルリン滯在三日目。今回のたびのもう一つの目的でもあった東西ドイツ分断の象徴である壁のギャラリーへと向かう。第二次大戦後、敗戦国ドイツは東西に分けられ、首都ベルリンは英米露仏による分割統治下におされた。ソ連統治下にあつた東ドイツは一九六一年八月十三日、東西ベルリン境界線を封鎖、一夜にして全長一五五メートルに及ぶ壁を築く。西ドイツがアメリカの援助によってめざましい経済復興をとげ活況を呈していく中、東ドイツはソ連による搾取と社会主義下の自由の規制と思想弾圧が続いていた。人々は東から西へと移動し続け、ベルリンはその通過点にあつた。東側による壁の構築はこの人の流れを食い止める」とにあつたのである。

しかしライブチヒから始まつた民主化運動は東ドイツ全域に広がり、もはや食い止めることができない勢いとなっていく。一九八九年十一月九日、東ドイツは東西ドイツの往き来を承認する。人々は雪崩を打つて、ブランデンブルク門の前に集り次々と壁を壊し、その壁を乗り越え、抱き合い、歓喜に沸いた。その渦の中に韓国人のKさんがいた。十八年

も前のことである。

私たちが見た壁のギャラリーは崩壊後シュプレー河畔にあつた壁の一部を約一・三キロメートルにわたり残したものだそうである。ベアテさんにとって一九八九年十一月九日の出来事はあまりに唐突でにわかには信じがたいものだった。ベルリンの自宅でテレビを見て初めて知り驚いたという。

東西の人々が手を取り合い、感涙にむせび喜びを分かち合つたのは一ヶ月の間だけ。そのうち冷静さを取り戻し、現実を直視するうちに愕然となる。それまでの分断の二八年間はお互いの価値観、経済格差など取り返しができないほどまでに変わつてしまつていたのである。パスポートを取り合つてまで会いに行つていた友人たちとも次第に疎遠になつていく。

一九九〇年東西ドイツ統一とはいえ、その実態は制度も組織も政治も、西側に完全に吸収された形での出発であった。この統一は西側には大きな経済負担を、東側には差別による屈辱と失望感をもたらすことになった。東側では欲求不満が暴力化し、アジア人特にベトナム人やアフリカ諸国からの移民たちへと向けられていった。

西ドイツ化されることは市場原理による競争社会に生きることを意味する。それまで貧しくとも共に助け合つて生きてきた共同体意識は崩れ、仲間や友人さえも競争相手となつていく。ぎすぎすした厳しい現実を前に、途方に暮れる老いの世代、ネオ・ナチ化

する若者、西にとつても東にとつても、大きな犠牲を払つての統一であった。

Kさんは壁が崩れ、東西の人々が喜びに沸き、抱き合う姿に祖国朝鮮半島の置かれている現実を重ね、歯ぎしりする思いだったのではないだろうか。あれから十八年。朝鮮半島は、一〇〇〇年の金大中前大統領の北朝鮮訪問から、関係が少しづつ変わりはじめている。今年（二〇〇七年）十月、ノ・ムヒョン大統領も陸路の境界線を越えて、北朝鮮を訪問した。ドイツの分断と統一を目の当たりにしてきたKさんは、南北に分断されている朝鮮半島の現実をどう見ているのだろうか？

（4）旅の最終日　日独の戦後の原点　ポツダムへ

日本に帰国する日の九月十八日、ベルリンからの飛行機は午後五時。それまでの時間をポツダム観光に決めたのは前日のことであった。旧東ドイツの都市を回り、ベルリンでナチス迫害のモニュメントや強制収容所を見てまわっているうちに、どうしても見ておきたいと思った場所、それがポツダムだつた。ガイドブックによるとベルリンから電車で一時間の距離である。急遽、ベルリン市内の観光を取りやめポツダムへと向かつた。

ポツダムはエルベの支流ハーフエル川と森と湖に囲まれ、多くの古城が点在する世界遺産の街である。というより私たちにとっては、第一次世界大戦の戦後処理について米・英・

ソの首脳（トルーマン・チャーチル・スター・リン）による三者会談が開かれた場所といつた方がわかりやすい。そこはホーエンツオレン家の王城の一つ、イギリス山荘風のツェツィーリエンホーフ宮殿である。会談場所となつた部屋は赤い絨毯が敷きつめられ、円卓も赤いクロスが掛けられてある。テーブルの真ん中には、三国旗が飾られ、椅子の配置からすべて当時のままを再現している。

会談が始まつて十日目の七月二六日、アメリカ、イギリス、中国の三ヶ国は日本に無条件降伏を促す。これが日本の戦後を決定付けた“ポツダム宣言”である。これを黙殺した日本は八月六日広島に、そして三日後の八月九日長崎に、二つの原爆が投下された。ドイツの東西分割、アメリカによる日本の占領、敗戦国日本とドイツの戦後の原点はこのポンツダムにあつたのだ。



ツェツィーリエンホーフ宮殿にて

さまざまの困難を抱えながら、統一の道を選ん

だ東西ドイツに必ずしも明るい前途が約束されていたわけではない。失業、民族差別、経済格差、ネオナチの台頭と社会不安は未だに十分解消されているとはい難い。東側の戦後復興はまだ途上にあって、あちらこちらに工事現場や廃墟らしきものが残っていた。

平和主義を掲げ、ナチと決別したはずの西ドイツも、残忍なユダヤ人迫害の事実が一般の人に知られるようになつたのは、一九八〇年代テレビやメディアを通じて流された情報によるものであつた。

しかし例え負の歴史であつたとしても、その事実を覆い隠すことなく、明らかにし克服する手立てを率先して行つてきたのはドイツ政府である。ベルリンをはじめ、各地で見られたモニュメント、周辺国との連携した教育への取り組み、それらは被害国も是としても認めていることである。

九月二九日、沖縄の宜野湾市で、来年の高校の教科書から軍による「集団自決の強制」の項が削除されることに反対する抗議の集会が行われた。十一万人という、復帰後最大の規模だつたと報道された。中には五万人と言い張る報道もあつたが…。

集会でいさつしたひとりの高校生の言葉が心に響く。「削除されるのはたつた一行かもしれない。でもその一行に沖縄戦で命を散らしたおじい、おばあの思いがいっぱい詰まっているのだ」と。削除に加担する側の人たちは、この高校生の悲しみの声をどう聞くのだろうか。

今回のドイツの旅は滞在日数も少なく、都市から都市を駆け足で走り抜けたようなものである。だからこの文章を旅のレポートなどというのは、おこがましいことで単なる感想文でしかないことを申し述べておく。

日本とドイツの間に置かれている歴史的、地理的な立場の違いを考えれば、単純な比較や論評は差し控えねばならないと思う。しかし過去と向き合い、旧被害国との間に信頼関係を結ぶ努力を地道に続けていること、これは旅の先々で感じ取つてきただことである。

一方の日本はどうだろうか？東アジアの中で孤立する日本。この中に、過去と真摯に向き合う姿勢ができるだろうか。ヨーロッパでは、日本について歴史認識をめぐり、頑迷に、周辺諸国と融和しようとしたい国というイメージが定着しつつあるといふ悲しいことである。

身近にあつた通信制中学

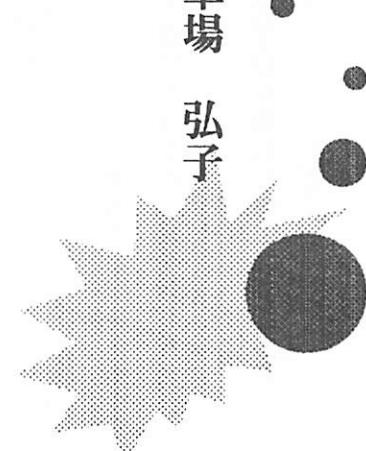
草場 弘子

満州へ

私の知人T・Zさんは、この三月通信制中学校を卒業した。妻R子さんと娘さんにも祝福され喜びひとしおの七四歳の春であった。

おそらく大方のひとにとつては、夜間中学の存在は知つていても、「通信制中学校」は耳新しい言葉ではなかろうか。だがこの通信制中学校は、一九四七年（昭和二二年）の学校教育法施行と共にあり、知る人ぞ知る六十年の長い歴史を持つものなのである。

この学校教育法により、新学制いわゆる六・三・三制が敷かれて中学校まで義務教育となつたのであるが、通信制中学校も同法第百五条に「中学校は、当分の間、尋常小学校卒業



者及び国民学校初等科修了者に対して、通信による教育を行うことができる」と法制化されているのである。

これは戦中戦後の混乱期に、就学の機を逸したまま社会に放り出された子どもが、いかに多かつたか、就学の場を求める子どもたちの声がいかに多かつたかを、如実に物語つてゐる条項ではなかろうか。

秋田県南秋田郡の小さな町に育つたTさんが、一家七人（母、姉二人、妹一人、叔母、Zさん）で開拓団に加わって満州（現在の中国東北部）に渡ったのは一九四五年（昭和二〇年）の三月、国民学校初等科六年生の時で、卒業を間際にしてのことだった。畠屋だつた祖父亡き後は日々の暮らししさえ逼迫していく中、すでに満州に職を得ている父を頼るべく、開拓団員募集の誘いに乗つたのだった。町では二軒目の移住だったようだ。

移送事情の悪化で、出発日や乗船場所が変わつたりして、ようようたどり着いたのは通化に近い垣仁県普楽堡と言う開拓村だった。十二歳の子どもの目には、中国人と仲良くやつてゐる平和な村としてうつつた。開拓村の周辺では中国の農民が自分の土地を耕しながら、開拓団の畑を手伝つていたといふ。

母と姉達・叔母は慣れない畑仕事を始め、Tさんは村の国民学校高等科に妹一人は初等科に通つた。父はまだ満鉄で働いてゐる間に召集令状を受け取りそのまま出征した。

そして八月、突然の終戦。開拓団の人たちは、中国人が仕立ててくれた馬車で全員通化に避難した。Tさん一家には五ヵ月足らずの開拓団の暮らししだった。

通化の町で

通化の町は騒然としていた。関東軍は敗戦を前に、総司令部を長春から「通化に移していた（八月十六日には武装解除された）八月九日に国境を越えて侵攻して来たソ連軍もすでにいた（数カ月後には退去した）日本人の避難民も、続々通化を目指して集まってきた。中国共産党正規軍として人民解放軍（八路軍）が九月四日に満州入り。当然国民党公安と対立関係にあり、緊迫していた。

混乱の中にも、避難してきた人たちを束ね中国側と折衝する窓口となる組織（例えば「通化日本人人民管理委員会など）が出来てきて、それなりの秩序が保たれていた。使役の割り当てなども、組織を通じて來たようである。

Tさん一家は、市街地から離れた小高い丘の上の建物を指定され、そこで他の地域から避難してきた家族といつしょに暮らした。この時点で、普楽堡の開拓団の人たちとは、ばらばらになつたようだとTさんは記憶している。

翌一九四六年二月三日、いわゆる「通化事件」に遭遇した。「よく判らなかつたけど怖か

つた。朝起きたら男は皆居なくなっていた。そして誰も帰つてこなかつたと思う」「フジタと言う大佐が事件の首謀者だという事で、往来を引き回されているのを目撃した。あの文化革命のときの様に」「今まであまり云わないで来たけど、あの通化事件って何だったのかとずっと気になつていた」とTさんは言う。

前年八月に日本が無条件降伏をした後、中国は激しい内戦状態が続いていた。毛沢東率いる共産党（八路軍）と蒋介石率いる国民党（國府軍）である。そしてそれぞれの側に味方をする日本人がいた。さらに、その両方の勢力と通じている人たちもいた。そして通化はその最前線の地であり、当時は共産党が支配していた。（ちなみに翌年は国民党により、大きく後退させられている）

いま、中国側は「通化二・三暴動」とよび「国民党側が日本ファシストの残党分子と結託しておこした暴動」と位置づけている。逮捕日本人三千人、銃殺を含む死者約千二百人。

八路軍と共に

それからいくばくもなく、知り合いの女性がTさん一家を訪ねてきた。看護婦だった叔母に八路軍の病院で働いてほしいとの要請だった。結局叔母と姉二人が看護婦として、T

さんは「軍医付き」となり、妹二人と母を含め一家七人で受ける事になった。四六年四月だった。その五ヵ月後から、通化にとどまつた人たちの帰還が始まる事になるのだが、Tさんたちには、知る由もなかつた。

ハルピン、牡丹江、チャムス、ボツリと八路軍の病院の移動に合わせTさんたちも馬車で移動した。Tさんと同じように家族連れも大勢いた。中国人軍医付きのTさんの勤務は、二四時間軍医の身の回り一切の世話をする事なので、母たちとは顔を合わせる程度のことしかなかつた。家族もちの軍医もそれは同様だつた。

ボツリの病院を最後に、八路軍と分かれた。この時の事の次第はわからないが、帰国できることになつたのである。四八年の始めの頃である。八路軍に入つて、二年を過ぎていった。故郷の同級生は、前年新制中学二年生に編入されているのだが、これもTさんには知る由もないことだつた。

帰國

ボツリから延吉へは、他から集まつてきた人たちと一緒に無蓋車に乗せられた。延吉の町も帰国者で溢れていた。居留民会という日本人の組織が出来ていて、帰国者のための小

学校も運営していた。Tさんは会の使い走りのような仕事を手伝うようになった。「帰れるようになつたら、乙ちゃんをまず帰してやるからね」と言っていたが、言葉どおりに第一便に入ってくれた。約百人程の人たちと馬車で鴨緑江を渡り、ようやく中国を出る事が出来た。結局延吉にはおよそ半年いた事になる。国境の町トモンから清津に出て、そこから帰還船に乗る。舞鶴に上陸するまでに三日位を要した。一九四八年八月。博多港を出でから三年四か月振りの故国之地を踏んだ。

帰郷そして上京

まずは故郷秋田を目指して帰る。ここで父が四六年に帰国し、いまは上京していると知つた。すでに同級生も、その春中学校を卒業していた。一息入れる間も惜しく、上京し父のもとへ向うが、東京の住宅難は予想以上に深刻で、一家で住めるところは無いに等しい。国分寺の叔母の家に世話になるが、いつまでも居るわけには行かなくて、たつた1カ月で母と子ども四人が、再び秋田に舞い戻つた。母の実家の援助もあつたが、Tさんも働いた。初めて母のもとを離れて、佃煮やに住み込んだ。

そういうしている間に、ようやく父に呼ばれて再び上京したのは、五〇年になつてからである。立飛の工員寮で、久々の父を交えての暮らしが始まつたのだったが、翌年焼け出

されフインカム寮に移った。父はそれを機に一念発起し、現在の地に家を建てた。その時一緒に建てた人たちも代替わりしたり経済的な問題で手放したりと、かなり入れ替わったが、Tさんは八〇年に建て替えをして、この地にすみ続いている。この建て替えを機に、スクリーン印刷の小さな工場をつくり独立した。

転職も片手に余るほど経験したが、今の仕事で安定を得た。結婚もした。待望の子も得た。両親を見取った。舞鶴に帰り着いて五十有余年生きるために夢中だった。

通信制中学校へ

Tさんと通信制中学校との出会いは、全くの偶然だった。ラジオを聞きながら工場で仕事をしている時、たまたま耳に飛び込んできたのが「通信制中学校」という言葉だった。二月のことだった。

中学校には行けなかつたとは言え、日常の暮らしにはなんの差し支えも無かつたし、仕事で支障をきたした事も無い。故郷の友たちは、何のわだかまりもなく「新制中学一期生」仲間として遇してくれる。満州でのあの稀有な体験や、戦後の混乱に揉まれて身についた生きる術は、学校で学ぶものに勝るとも劣らないものだった、と今にして思える。

一方、でも・・。という気持ちも無いわけではない。教室、校庭、級友、先生・・自分の少年時代にそれがすっぽり抜けている寂しさの様なものは、時々感じていた。

思い立つと行動は早い。すぐ学校に電話を入れ、面接をし入学を決めて、私達を驚かせた。「レポートに追われて頭が痛いよ」と言いながらも、いきいきとしていた。三年間日曜日の半分は登校日であったが、無欠席を通したそうである。学校行事も遠足も修学旅行も、十分楽しんだようである。一学年四十名の定員に、Tさんのクラスは十四名でスタートしたが卒業時は九名となつた。高齢や病気で断念した人、亡くなつた人もいる。「みんなトシだからねえ」とTさん。一九六〇年を前後して、三十名を越える入学者がいたが、その後はある増える事なく現在にいたつている。

入学して何が良かったかの愚問に「学校という雰囲気を味わえた事、今も付き合つている友達に出会えた事、いいなと思える先生に出会えた事」とTさんらしく優等生の答が返ってきた。「知らないまま」ここまで来た人も、まだまだいると思う。もっと知られて欲しいと思う」と付け加えるTさんである。

現在公認の通信制中学校は、Tさんの母校千代田区立神田一橋中学校と、大阪府立天王寺中学校の二校だけである。このままいけばこの通信制中学校は、間もなくその役割を終えて幕を閉じる事になる。

それは「中学校通信教育規定（昭二二文部省令二五）」の「第二条 中学校の通信教育を受けることのできる者は、昭和二十一年三月三十一日以前の尋常小学校及び国民学校初等科修了者に限る」とはつきり限定されており、一九三五年生れ現在七二歳以上の、日本の教育制度の中で学び卒業・終了した人となるからである。

しかし一橋中学の募集のビラには「現行制度での義務教育未終了者で学齢を超過した者」の一項もある。Tさんに見られるように、戦中戦後の混乱期に就学の機をのがした世代のみならず、現在もいろいろな理由で、学びを望みながらそれを叶えられずにいる人は少なくない。それを視野に入れて入学資格条件が緩められる傾向になつてきつつあるのかも知れない。学びの選択肢は、少しでも多くあつて欲しいから。

地 球 一周船の旅

大井 和子

(一) セカンドライフ・スタート

○二年十二月十日～○三年三月一四日、ピースボート地球一周、
南半球周りの船旅に参加した。

その年の三月三一日、約三十年勤めた勤務を定年退職していた。三～四年前にリタイア
していた夫と夫婦での参加だった。

かねがね、二人がフリーになつたら国内、国外を問わず、行きたいところ、興味あると
ころにロングステイして、その土地の文化に触れ、その土地の人々と親しく交流してみた
いものと話し合っていた。



乗船したオリビア号

定年を迎えて程ないある日ある朝、新聞の一面に載つたピースボートの小さい広告が目に留まつた。九五日に及ぶ船旅、そして南回りとあって、ほとんどが行つた」とのない国々、これからもなかなか行く機会のなさそうな、ケニア、南アフリカ、ブラジル、チリ、南極、南太平洋の島々（イースター島・タヒチ・サモア等々）、息を呑む程の魅力を感じた。九五日は長いが、ロングステイを志している身であれば、手始めにこの船に乗るのも選択肢の一つではないかと思つた。そこで、隣で朝のコーヒーをすすつてゐる夫に語つた。即座に「いいね！」の返事。決まつた！ 行くぞ！ こうして無謀にも思えるピースボート地球一周の船旅に乗船を決めたのだった。

前の年の十一月、我々にとつての初孫が生まれていた。それも双子の誕生だつた。娘は育児休業中であつた。職場に復帰するについては、私たちの手助けの態勢が必要だつた。九五日間、日本を留守にすることを伝えたところ「わあ、育児休業延長するしかない！」とあわてた様子だつた。

三ヶ月に及ぶ留守は、それなりにいろいろと手当てが必要であり、忙しい日常生活に加え、旅行の準備が加わって、忙しさはいや増した。

また普通の観光旅行とは一味違うらしいピースボートの旅、辻本清美さんが早稲田の学生時代に仲間とともに「若者に生の世界を見る機会を」と立ち上げたという程度にしか認識がなかつた。

ピースボートについて少しでも知りたいと、事務局のボラスター（ボランティア・スタッフ）にもなつた。仕事は問い合わせに応じて資料を送る、ボスターの掲示準備、ボスターの掲示に出向く、パソコンへデータ入力、郵便局など使い走り等々。（十一時間働いたところで、私はボラスターから身を引いた）当時一時間千円のボラスター料で、乗船費用から差し引かれる制度だった。船賃のほとんどをボラスターで稼ぐつわものも少なからずいた。たった十一時間、七日程とはいって、事務所に通つたことでピースボートについての何がしかを肌で感じることができたのだった。

私は難病を抱えているので、主治医の「寛解期である」旨の診断書を必要とした。また、黄熱病の予防注射が必要な地域であったが、「受けられない」という証明書も頂戴した。毎日飲まないと命に関わるステロイド剤をはじめ、毎日大量に飲む薬九五日分、ステロイド剤の副作用で激しい骨粗しそう症になつてるので、痛みの対処に漢方薬や湿布剤等々、大きなトランクの一つは私の薬で満杯になつた。

出航する晴海に旅行中必要とする荷物を送り込めば、各自の部屋に運び込んでおいてくれる。私は知恵を絞り、夫と一つずつ四段のプラスティックの衣装ケースを買い求め、衣類をつめて、ダンボールに戻し、荷物の一環として送った。これは誠にいいアイディアだった。衣類の出し入れの便利さは言うに及ばず、パソコンの置き台としても素晴らしい働きをし、大満足したのだつた。

さて、いよいよ地球一周船旅の出航を明日に控えた。晴海埠頭十二時の出航、集合は十時とあつて、晴海に前泊することにした。地球一周という大掛かりな両親の旅立ちを祝つて、共働きにもかかわらず、娘二家族も前泊で見送りにきててくれた。また大阪から私の妹までがひょっこり顔を出し、うれしいやらびつくりするやらであつた。

出航前日の十二月九日は東京にしてはめずらしい大雪の朝だつた。庭をはじめ、あたり一面の美しい銀世界・・門出を祝つているのかな・・多難な旅を象徴するのかな・・複雑な思いが胸をよぎつた。仕事を終えて、一才になつたばかりの双子の孫を連れて、積み残しの荷物を運んできてくれる次女の車がスリップしないことを祈つた。

翌十日、快晴のなか、予定通りの正午、大勢に見送られて晴海埠頭を出航した。出航曲『LIVE FOR LOVE UNITED』が流れ、七色のテープが交錯し、腹に響

く銅鑼の音とともに船は少しづつ岸壁を離れた。（テープについては毎回、環境汚染の面で検討課題になつてゐるそうです。見送りのピースボートスタッフが責任を持つて片付けるということです、継続されていました。）

このような感動の出航風景は、この後十八回の寄港地で十八回あり、毎回、毎回胸の高鳴りを覚えるいいものだった。若者たちが各港での交流会で親交を深めた人たちと、別れを惜しんで涙する姿をどれほど見たことだろう。

翌日神戸に寄港、関西方面からの乗船客を乗せて、ピースボートのチャーター船、オリビア号（15・791t）、乗船客五一五人、乗組員約三百人、計八百余人を乗せて、いよいよ地球一周の船旅はスタートした。

九五日間で南シナ海、マラッカ海峡、インド洋、喜望峰、大西洋、パタゴニア水道、太平洋をまわる航路28、508マイル、十四ヶ国、十八寄港のスケジュールである。

私たちは六階左舷、窓のある比較的ゆっくりした部屋を取つた。初めての長期の船旅に船賃をちょっと奮発したのだった。廊下を挟んでのお向かいは女性の四人部屋だった。荷解きもそこそこに、さうそくお互いの部屋を行き来し、自己紹介しあつたり、写真を撮つたりしてすぐに親しくなつた。私たちの船室には美しい花籠が「WELCOME」という

ようになっていた。

乗船客は全国津々浦々から集つた男性一八五名、女性三三〇名、やはり二十代、三十代の若者が半数を超えていた。五十代～八十代も三割程度の参加だった。若者の船というイメージのピースボートだが、我々熟年の参加があつたればこそその運営、参加することだけで「平和国際交流」を目指すピースボートの活動に大きく貢献しているとの説明があつた。熟年組はグレードの高い船室を使

い、高額のオプショナルツアートにも多々参加し、船内でもバーの交わりを楽しむなど、経済力を發揮する事によって、チャーターボート運行の助けになつてているのである。

五一五名の乗船客とスタッフ、乗組員計八百余名が一つの村を形作るかのようにして、九五日の旅が始まった。乗船客は九五%が日本人であるが、乗務員はほとんど外国人、我々のルームメイドのブルガリア人オルガを始め、船で働く人々の国籍はまちまちであった。それ違う相手によつて英語・スペイン語・ロシア語。中国語・日本語等々で挨拶を交わしたのだつた。



仲良くなつた同船者たちと、右端筆者



あきる野ものがたり

町田 輝子

(1)はじめに

私が、あきる野市のあるお寺であつたひとつの真実を知つたのは、最近のことである。それは朝鮮戦争に参戦した在日義勇軍兵士にまつわる話であった。戦死した義勇軍兵士達の遺骨を五二柱も供養していた寺があきる野にあるというのだ。遺骨は休戦から十年後に、すべて立川基地から韓国軍の軍用機で祖国に帰還し、国立墓地に埋葬されたという。私の身近で、このような事が行なわれていた事に驚き、何があつたのかを知りたいと思つた。

「つむぐ」九号で在日朝鮮人の方達から聞き書きをしたが、その時には出てこなかつた話であった。幸運にも「つむぐの会」のなかに、この寺が運営母胎である保育園の人と大

学が同級であるメンバーがいて、さつそく連絡を取り、話を聞かせていただくことになった。

その寺はあきる野市草花にある大行寺で、草花丘陵の麓に位置し、横田基地からは多摩川を越えて自動車で約十分、立川基地からも自動車で約三十分ほどの道のりだ。舞台となる大行寺は、六百年前の鎌倉時代に建立された真言宗豊山派の古刹で、奈良の長谷寺が本山である。境内の一隅には明るい色づかいの「草花保育園」の園舎があり、木造の古い本堂と好対をなしている。その園の山城清子さんがにこやかな笑顔で、私達を迎えてくれた。

私達が訪ねた六月七日は梅雨前のさわやかな晴天で、木々の緑が目に染みるようだった。清子さんの案内で、私達は緑の葉で涼しげにおおわれた境内を過ぎ、墓地に通じる参道を歩いていった。清子さんの話では、毎年六月二五日には、朝鮮戦争で犠牲になつた在日義勇兵たちの慰靈祭が行なわれているという。「今年は、どういうわけか早くて、実は昨日（六月六日）に慰靈祭をされたんです」とのこと。

本堂の裏手に広がる墓地の奥に建つてある在日義勇兵たちの忠魂碑を目指して、墓地の中を進んで行くと、韓国名の墓碑が多く目に付いた。日本人の墓碑と並んで、垣根もなく、安らかな時間が流れている。

前日の日に慰靈祭が行なわれたので、巨大な忠魂碑にはみずみずしい花籠が、供えられていた。忠魂碑には五二名の名前が刻まれている。年月を経て石肌は苔むしていて、義勇軍



在日義勇軍犠牲者の忠魂碑(大行寺)

兵士達の勇敢な行動がだんだん風化されて行くようと思われた。歴史の流れとその重みを感じさせられた。清子さんも「拓本を採つておかないと、人名が摩擦してきて、読みづらくなってしまう」と、憂いていた。午後の日差しを浴びながら、のどかな墓地の中にいると、人間の記憶のはかなさを感じ、「忘れないで」と言う声が聞こえそうだ。ある。保育園から園児の元気な声が聞こえて来て、一瞬に現在に戻った。

(2)両親のこと

在日義勇軍兵士の忠魂碑を見学させていただいた後、本堂で彼らの供養を受けた清子さんのお父さん・山城祐尊氏はどういう人だったのか、清子さんからゆづくりとお話を伺うことができた。祐尊氏は日韓併合下の一九一〇年、朝鮮の釜山（現韓国、釜山）近郊の農家に生まれた。しかし、貧しく食べるのも難しい生活の中で、どうしても勉強がし

たくて、通度寺（トンドサ）に弟子入りをしたという。しかしさらに勉強がしたいという思いが募り、日本に渡ることを決意する。一九二五年（大正十四年）、祐尊氏は十五才であつたが、自身日本に向かい、多西村にある大行寺で日本での生活を始めた。しかし檀家数も少なく、一日の主な仕事は農作業ばかりで、とてもやりたかった勉強は出来なかつた。二年ほど経つても畠仕事と檀家でのお經読みばかりの生活に困つて、祖国の修行寺、通度寺の師匠に相談すると、日本の住職を紹介され、その紹介で台東区根岸の千手院に弟子入りする事ができた。そこで七年間修業して、いろいろなことを学び、今度は花蔵院の住職と兼任の住職として大行寺にもどつて来る。一九三五年（昭一〇）のことである。そして一九四二年（昭一七）には朝鮮から、生活に苦しんでいた両親や弟妹を呼び寄せて近くに住まわせた。

その当時、大行寺は農村地域にあり、忙しい農繁期には、農家は子供達の面倒を見ることが出来ず、事故が起きることもあつた。祐尊氏は見かねて、農繁期の託児所を開いた。その後、親達の強い要望があり常設の保育園が設けられた（一九三九年）。現在境内の一角で運営されている「草花保育園」の前身である。

大行寺の住職になつて二年、その立場にもようやく慣れた頃、祐尊氏は奥多摩出身の女性と見合いし結婚した。彼女も勉強がしたい為に東京の女学校に行き、卒業後は立川の蚕種試験場に勤めていた。そして、職場の上司から祐尊氏との結婚を薦められた。この時代

は在日の人との結婚には偏見が強い時代であったが、父親が祐尊氏の眞面目で向上心が強く、いろんな本を読んで読書家である点が気に入つて、そのような人柄だつたらかまわないと言つたそうである。清子さんは「今も、私の時代も、結婚するとなると、家系はこういうことです、それでよろしいですかと言つておかなければいけない感じがありますね。そしてそういうと、私の姉妹あたりの頃は『じや結構です』と断られるほうが多かつたのです」と打ち明けてくれた。こうした話を聞くと、彼女は、世の中に対して強い意思と行動力を持って生きてきたのだと感じた。

結婚してからは、祐尊氏は寺に留守番の妻を残して、昼間は日白商業学校に旧制中学の修了資格を取る為に二年間通学し、検定試験にも合格した。さらに日大の夜学に三年間通い、卒業した。卒業後、中央社会事業協会付属社会事業研究所の給費四十円の出る研究生になり、研究に励んだ。一年間の修業が太平洋戦争の為に繰上げとなり、一九四一年（昭一六）十二月末で修了となつた。祐尊氏はその研究発表があつた十二月八日のことをよく清子さんに話して、「研究発表の最中、真珠湾攻撃の号外が飛び交つて大変だった」と言つていたという。このような祐尊氏の若き日の勉強振りを聞くと、その向上心は、とても凡人には真似のできるものではないと思つた。

社会事業研究所を出たあと、祐尊氏は東京府に一九四二年（昭一七）から就職し、西多

摩地方事務所・兵事厚生課に勤務した。この課は今の福祉業務にあたるものから、徵兵検査の立会いまで行なつた。翌年から東京府は東京都に変わり、託児所も「戦時託児所」と名称が変更されていった。兵事厚生課の主任だった祐尊氏は戦時託児所を西多摩地区に開設していく最前線に立つた。大行寺の保育園も地域名の多西村から戦時託児所令により「多西戦時託児所」と名称が変わった。

終戦後、祐尊氏は日本人ではないからと、自分から東京都を退職した。「在日朝鮮人」ということは地域に自然と知られていたので、日頃から祖国の人達が訪ねてきたり、頼つて来ていた。

「だから、家の中で、年中『日韓問題』が起こつているような感じでした。お父さんは嫌と言えない人で、世の中が食べるのにやつとの時で、うちも苦しい時だったの、母はいつも大変でしたよ」と、清子さんは笑いながら話した。

(3) 新たに戦いが

ようやく世の中も落ち着きを取り戻してきた一九五〇年（昭二二五）六月二十五日に朝鮮半島で新たに戦争が起きた。朝鮮半島を南北に分け、米ソの東西冷戦のぶつかり合いの戦いであった。日本で学んでいた若者、主に大学生達が祖国を守る為に、「在日本韓国居留民団」（略して民団・現「在日本韓国民団」）の呼びかけに応じて「在日学徒義勇軍」が誕生した。

この義勇軍には学生だけでなく、同じ志を持つ一般人も参加していた。
戦いの最中の十月には、戦死した義勇軍兵士の遺骨を仲間の兵士が探し出して、五二柱の遺骨を日本に持ち帰ってきた。

持ち帰った遺骨は民団とも親交があり、在日韓国人の祐尊氏が住職を勤めるあきる野の大行寺を頼つて持ち込まれた。そして寺に納骨堂を建立して慰靈してほしいと懇願された。清子さんによれば、祐尊氏と義勇軍兵士との直接の親交はなかつたが、民団を介して頼まれたらしい。

民団とは組織だけでなく、個人的な付き合いがあつたので頼まれたのではないかという。五二柱を一度に預かるのはどこでもできる事はないので、民団も住職を知っていたからこそ頼んだのだろう。遺骨は祐尊氏の手で丁重に供養された。朝鮮戦争は一九五三年（昭二八）七月に、休戦を迎えた。

それから六年後の一九五九年（昭三四）六月二十五日に行なわれた慰靈祭で、忠魂碑が建立された。高さ四メートルにもなる巨大な石碑で、墓地の奥にあり、偉業が偲ばれる碑である。



義勇軍兵士達の遺骨を納めていた納骨堂(大行寺)

この碑に刻まれている兵士達には家族が居なかつたのか、とても気になつたので、私は清子さんに聞いてみた。しかし、その辺のところは解らないそうである。日本に住んでいた人達が兵士として参加したので、身内の人人が居れば遺骨を引き取るのがあたりまえなのではと私は思つた。しかし、それぞれに遺骨をひきとつたにしても、名前だけは残したいと思つた人が居たかも知れない。個人のお墓に入ると、義勇軍として参戦した歴史が消えてしまうので、証としてまとめて残しておきたかったのではないか。忠魂碑に分骨した人もいたかも知れないが、名前が風化したら、韓国の建国に尽力した事実が残らなくなる。実は日本の忠魂碑も名前は刻まれているが、遺骨は個々で引き取つていいという。そこで私は思わず、清子さんに大行寺に埋葬されている兵士が居ないか聞いてみたが、そういう人は居ないと言うことである。

休戦から十年が経つてから、韓国で独立運動の志士や朝鮮戦争の戦死者を慰靈する戦没者墓地に、愛國志士が埋葬されることが公表された。一九六三年（昭二八）三月のことである。民団と義勇軍帰還者達が相談して、六・二五戦争で戦死した義勇軍兵士達の遺骨も、祖国の独立運動や戦争で戦死した愛國者達と同じ場所に埋葬・慰靈することが、兵士達の愛国行為に報いる事になるのではという結論に達した。そこで韓国政府に陳情を繰り返して、その年の一一月に受け入れられた。

韓国政府は米軍立川基地に韓国軍軍用機を差し向け、五二一柱の遺骨をソウルに運んで行

つた。義勇軍兵士の参戦の意義がみとめられたのであつた。身近な立川基地に、あまり知られていなかつた歴史の小さな物語が今まで残されていたのだった。

(4) 在日として

祐尊氏が在日であることは、地域に知られていた。清子さんも子供の頃は差別があつたと話してくれた。『お前は日本人ではない』と言われていじめにあつた折に、自信を持つて乗り越えられるような子供ではなかつたのです。島崎藤村の『破壊』が胸にこたえたましだね。』小説とはまったく違うけれど、心情的に解る気がしたそうである。友達と付き合う時には、いつもそのことが胸にあつた。小学校や中学校の友達は、同じ地域で育つたので、その事も知つていたので何ということもなかつたが、高校の友達には、どこかで自分から引いていたところがあつた。「でも、それは自分の性格もあるかもしれない」と清子さんは話した。

「差別している側は気づかずに差別している事があるが、差別を受けている側は言葉や素振りに敏感になつてゐるのです。また、在日といつてもそれぞれの思いはさまざまです。たとえば、本名を言わない人もいれば、本名で生活している人もいる。中には、むしろ在日であることを「売り」にしているような人もいる。お互いが考え方や性格で自分の生き

方を選んでいるが、互いに足の引っ張りあいもあれば、嫉妬しあう時もあり、人間としてすごく複雑なのです。」

雑誌に、キムチや焼肉がはやるのはある意味で、差別が少し薄くなつたのではと書いていた人がいたが、以前はキムチの匂いは私達にはタブーであつたと清子さんはいう。今ではニンニクや焼肉が日常の料理に入つてきて、それらが韓国の料理だと知らない人がこれからは出てくるかもしれない。そういう意味では、いろんなことが流入してくると、良いことも出てくるようと思う。若い人の中には日韓の歴史も知らなければ、差別用語も知らない人もいる、だから自然に付き合える世代も出て来るかもしれない。しかし本当は過去の日韓の歴史をきちんと知つた上で、付き合つていくのが私たちの責任であると思う。

「本当はどうでしょうね」清子さんは言う、「でも、その事に触れて欲しくない人も中に入りし、現代でも薄れているとはいえ差別は、見えないとこにあるから」と在日の複雑な胸のうちを代弁する。

あきる野の大行寺と朝鮮がつむぎだす一つのものがたりは、立川基地から五二柱の遺骨が移送された事で完結し、秘められたままで終つていた。清子さんと一緒に、そのものがたりをたどつたことで、私は戦争が、どのような理由があるうと、どの時代でも絶対に起きて欲しくないし、起こしてはならないと改めて思ったのだつた。

◆ 寄稿欄 ◆

韓国熱

中野恵子

日本に韓流ブームが押し寄せてきて久しい。

私が韓国を巡るいろいろな物に興味を持ち、どっぷりのめり込んでいると知った人々の反応は皆一様である。やっぱりヨン様から? と問う目をしている。答えは「NO!」。

私と韓国との関わりは、今から十二年前の一九九五年。当時、国立中央博物館として使われていた、旧朝鮮総督府の建物が八月十五日で閉鎖し、他に移転するという。これを知った主人が、取り壊される前に見ておきたいというのに、私と娘は、海外に行けるならと軽い気持ちで、ついて行ったのが初めである。

出かける数日前、三豊(サンブン)百貨店の崩壊事故があり、ソウルの街中に、生存者

発見という三豊関連のニュースが溢れていた。

韓国についての知識は、事前に主人から渡されて読んだ一冊の本から得た知識だけ。それまで数回の海外旅行を経験していた私は、行けば何とかなるさと高を括っていた。ところが、街中に氾濫する記号もどきのハングル文字の看板は読めない。道を尋ねても英語があまり通じない。デパートは崩れるわ、社長さん、社長さんと片言の日本語で主人を煽りて、料金をぼつたくろうとするタクシー運転手。言葉が通じなくて困っていた私達を助けてくれたのは、日帝時代に日本語教育を受けた老人とは。この国はなんて国だろうというのが、韓国に対する私の第一印象だった。

初訪韓から五年後の二〇〇〇年春、私は五十代半ばを迎えて、何か新しい言語に挑戦したいと思っていた。欧米の言語だと英語とゴチャゴチャになってしまふ気がして、韓国語化中国語のいずれかにと、的を絞つたが、どちらにするか決めかねていた。そんな時にたまたま見つけたエッセイに私は釘付けになった。そこには、六十代の女性が韓国語を始めようとした動機が書かれていた。

その方が韓国文化に引かれ韓国語を学ぼうと思ったのが、果たしてこの年で…とためらっていた時に読んだ本の中の言葉に励まされ、学ぶきっかけになつたという。

その言葉とは、「朝鮮の詩」、「オンドル夜話」を書いた尹学準（ヨン・ハクジュン）という人が「大学の四年間で習得できる外国语はコリア語くらいだろう。コリア語は日本

語と共通点が多いから、やる気、根気、暗記の三つの『キ』で頑張れ」と。これなら六十年代の自分でもやれるのでは、と元気が出たというのである。

このエッセイに出会ったとき、わたしも韓国語に決めよう。やる気、根気は誰にも負けない自信はある。ただ、暗記はな?と思つたが、幸い、私はこの女性より若いしとも思った。

しかし、同じ顔つきをしている者同士が心を通わせることが出来なかつた、初訪韓のときの体験、もどかしさが心をよぎつたのも否めない。

幸運なことに、韓国語を学ぼうと決心した年はちょうど、日韓共催のワールドカップサッカー大会の二年前で、家の近くの公民館でもハングル講座が開かれ、講師はなんと、当時、NHKテレビハングル講座の担当講師だ。

すぐに飛びついで私がハングルの面白さにのめり込むのに時間はかからなかつた。講師の教え上手ということもあり、言語を窓口として韓国文化、歴史、食物へとますます私の興味の対象は広がつていった。仲間も増え、異文化の勉強が楽しくて仕方がなかつた。

しかし、私には克服しなければいけない大きな問題があつた。キムチの国に魅かれるもの、キムチやニンニク料理が大の苦手だった。仲間との飲み会も韓国料理店になることが多い。オイキムチ、カクテキキムチ、ペチュキムチと沢山のキムチが並ぶし、どの料理にもニンニクがたっぷり。初めは、匂いをかかないように息をつめ、少しだけ口にしてい

た。その後も本など読み漁り、ますます赤い国へのめり込むにつれ、キムチを征しなければキムチの国の文化、心の半分も理解できないと思うと辛かつた。そんなとき、キムチ作り教室に参加する機会を得た。

室内に充满するニンニクやニラのすごい匂い。講師手作りのキムチを悲痛な思いで、恐る恐る口にしてみた。なんとすんなり口に入る。美味しいキムチに出合えたのだ。料理好きな私は、気がつけば夢中になつて白菜の葉一枚一枚に、丁寧に赤い葉念を塗り込む作業をしていた。十種以上の材料を混ぜて作った葉念で味が複雑に融合した発酵キムチ。この日を境に、少しづつキムチも食べられるようになり、気がつけば自家製キムチも作るようになり、韓国メニューが我が家の定番料理に仲間入りするのに時間がかからなかつた。

私の中の韓国熱はますます熱を帯び、ハングルを聞き取ろうと、映画、ドラマに忙しいし、ベッドサイドに山積みにされた本を見て、

「今にあの本が雪崩を起こすぞ」

と、どんなに主人に脅かされても、

「好きな韓国関連の本で圧死するなら本望よ」笑つてうそぶいている私である。



校流で「なべ田日本と韓国

—— 茶遊へ「」「」「」——

古舞 Hui

♪「茶遊」にソウルの女性たちがやってくる

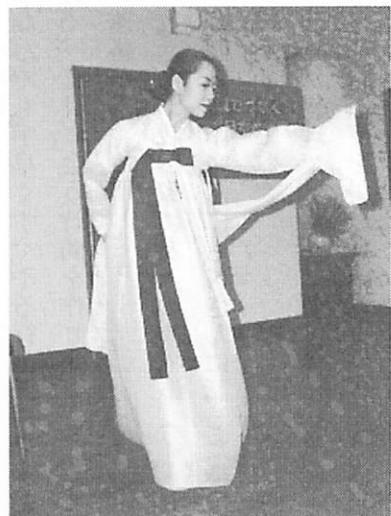
白装束に、手に白い布を持ち、幽愁をこめた所作で内面の動きを見事に表現する幽堂の舞い“サルプリ”。優雅でいて勇壮、さりげなく高度の技巧性に富む王妃の舞い“太平舞”。キム・ウンスク、リ・ヒヨンスク、パク・ウニヨン、キム・ヘス、キム・キュンエら五人の女性たちが次々と繰り広げる韓国の伝統舞踊は魅惑的で幽艶な幻想の世界を創出する。

四月二七日、私がマネジメントする「ギャラリー茶遊」では韓国から伝統舞踊の先生と生徒四人の女性を迎えて、三時間にわたって交流の宴を開いていた。四十人の観客を魅了し尽くしたこの企画は思いがけない出会いと大胆ともいえる発想によって作り出されたもの

である。

これまで韓国を観光でまわるだけに過ぎなかつた私が、なぜ交流だけのために韓国から五人の女性を迎えるという大胆な企画をするに至つたのか？

ことの発端は昨年（〇六年）の十二月にさかのぼる。スペイン人の友人や中国通の友人らと“食で楽しむ国際交流”をテーマに各国の家庭料理を作り、食し、おしゃべりを楽しむ会をシリーズで開いて大好評であつた。アンコールの声に押され、よし！〇七年は韓国料理でいこうと韓国に友人、知人も多く、ハングルも勉強中でバリバリの韓国通でもあるNさんに相談を持ちかけた。



サルブリの舞

Nさんには「在日の方でもOKであるが、できれば日本人と結婚あるいは留学などで日本に滞在している韓国人を」と希望を伝えた。というのは韓国で生まれ育つた人ならではの味覚、感じ方、物の見方を大切にしたいと思つたこと、そして最近の韓流ブームで韓国を

もっと知りたいという人の要望にも応えたいという思いからである。

なんでも手早くすぐやる行動派のNさんから間もなく、この正月に来日する友人がいるので、正月に会う時間を作り紹介しよう、日本語も堪能な方ですよとなんとも頼もしい連絡が入った。

Nさんが我が家に友人の李玄淑（イ・ヒョンスク）さんを伴つて訪れたのは年が明けた一月四日。李さんにもNさんに話した趣旨と内容を伝えた所、李さんからは思いもかけない提案がなされた。

それは料理ではなく、韓国の伝統舞踊を通して日韓の文化交流をするはどうかと。先生と仲間に声をかければ実現の可能性は高いのだという。

さて、食から舞踊への変更、さらには李さんも含めて5人の女性たちの来日ということになると、来日のための費用、渡航費、宿泊費、滞在費も相当なものになる。舞踊の先生であるキム・ウンスクさんは海外公演も多いプロ中のプロとのこと。こちらは謝礼さえ十分用意できない状況なのだ。

また、夫はともかくハンブルの読み書きは勿論、会話さえできない私に習慣やものの考え方の違う韓国の人たちと合同の企画などできるものだろうか。

外国人を招いたり、一緒に企画するということとはこれまでも何度があつたが、すべて日

本に滞在する外国人で日本語ができることが前提になっていた。東京都心よりソウルの方が身近に思う私も、合同の企画ということになると話は違つてくる。あれこれ逡巡する一方で、面白好きの私は“これはすごいぞ、でつかいぞ”と深く考える前にNさんの協力をあてにして「やりましょう」と返事をしていたのである。

それから四ヶ月。東京、ソウル間で電話やファックスでのやりとりが始まる。李さんもお連れ合いのイ・ヒヨクソプさんも日本語が堪能であるが、私と夫は資料を読み込んだり、資料をもとにチラシやプログラムを作成するほどの語学力はない。翻訳ソフトを使って文章を交換するものの、翻訳されてくる日本語の解読に四苦八苦する日々が続く。

開催日までに残された日数は一ヶ月あまり。このやり方で無事当日を迎えることができるのでどうか。李さんを除く他の四人の方とは、面識がないまま本番を迎えるとの不安もある。行き違いや、トラブルがあれば李さんにも迷惑がかかる。迷っているより、いつそうのことソウルに行つて膝を交えて相談した方がいいのではと思い立つたのが4月の初め、開催日一ヶ月ほど前である。

李さんとは五月七日に会う日程の調整もでき連休明けの五月五日はソウルへと向かつた。

♪ ソウル再発見の旅

ソウルに行くからには勿論、打ち合わせが第一目的である。しかしせつかくソウルに出来かかることだから、ソウルを再発見してみようとソウルの観光スポットや情報を収集することにした。ソウルは今、日帝時代（一九一〇～一九四五年）以前の街並みを復元し、世界遺産の指定を目指して都市造成大計画を推し進めていいる真っ最中である。今回は数ある情報の中から五月六日、毎年第1日曜日に行われる李朝王家の祭礼、太宗廟祭の見学とこの四、三八年ぶりに一般解放された大統領府の裏山、北白岳に上る計画を立てた。

五月六日、宗廟で李朝王家の末裔が執り行う古式豊かな祭礼の儀式はまるで映画のロケ現場に居合わせたような錯覚にとらわれる。一方で宗廟周辺では、サムノリや囲碁に興じるお年寄りや無料の散髪や健康チェックのサービスを受ける人であふれかえり、元気な老人パワーを見せつけている。日本ではたとえ敬老の日であっても目にすることのない光景だ。

五月八日、一九六八年一月一一日、北朝鮮が三一名のゲリラをソウルに侵入させ、青瓦台を襲撃した事件（1・21事態）以来、三八年ぶりに一般解放されたばかりの北白岳をめざす。ここに上るために、予め文化財省に申請をし、許可を得なければならぬ。文化財務省からは九時半までにパスポート持参のうえ、手続きをするよう指示があつた。手続きの際ふと申請者名簿を覗くとこれまでこのコースを歩いた外国人は二一名、そのうち日本人は私たちが一番目と二番目である。ここはまだ一般には知られていない隠れたスポット

ツトのようだ。

この北白岳コースは彰義門を出発点として、北白岳へ登り三清公園を経て成均館大学に至る三時間コースである。彰義門についてまずはびっくり。続々と集つてくる韓国人たちは皆、登山帽に登山靴、手にはステッキと言う完全装備のいでたちなのである。私はといえば「金比羅山と思えばいいよ。スニーカーで十分！」という夫の言葉を信じて、ジーンズにスニーカーにショルダーバッグという買い物にでも出かけるような服装だ。夫とて同じこと。周囲から完全に浮いてしまっている。追打ちをかけるようにガイドが「途中、トイレはありません。今のうちに済ませておいてください」と呼びかける。

不安におびえながらもここまで来て引き返す訳にもいかず、集った約百人ほどの列に加わることとなる。途中ゲリラが弾丸を撃ち込んだとされる木に今も生々しく残る数ヶ所の窟みを見ながら、急峻な階段を登り高度を上げていくと、景福宮を中心としたソウルの街が眼下に見える。四方を山々に囲まれ、風水に基づいて築造された美しい都ソウル。景福宮の前に立てられた総督府の建物がいかにおぞましく、醜惡なものであつたかを改めて実感する。

▲ソウルのレストランで打ち合わせを

五月七日、午後四時、李さんと約束した待ち合わせの場所、地下鉄六号線花郎台駅へと

向かう。そこは緑豊かで閑静な趣を湛えた大学の街である。

李さんの案内で最初に訪れたのは駅から車で五分ほどの韓国陸軍士官学校だ。そこは李さんの夫であるイ・ヒヨクソプさんが今年二月まで学生に国際政治を講義していたところである。

校門を抜けると森と丘陵の広がる敷地二二六万平米にも及ぶ広大な緑の大地、その中に校舎、生徒寮、教会・聖堂、法堂など一七六棟の建物が点在する。さらにはテニスコートに、サッカー場、ゴルフ場まで敷設されているのだから、校内というより一つのコミュニティといつたほうが適切かもしない。

学生たちは被服、宿泊、学費が賦与されるばかりでなく所定の給料を受けることができる。入学資格は韓国人で満十七才から二十一才までの高卒の未婚の男女。ここから陸軍のエリートが育っていく。イ・ヒヨクソプさんもこの学校の出身であり、後ソウル大学の大学院に学び教授となつて戻つてくる。

一九七〇年代には四年間、アメリカのミシガン大学に留学、国際政治学の博士号を取得し学校に戻つて、再度教授のポストに就くことになる。

さて、案内されているうちにどうしても気になる疑問が湧いてきた。それは国立の学校になぜ宗教の施設があるのかということ、しかもキリスト教、仏教。キリスト教にいたつてはカソリックとプロテスタントの二つの教会があるのである。

李さんからは“自由に外出できない学生の信仰の自由を保障するため”という説明があった。宗教を身近に感じることのない日常を送る私などには想像すらできないことである。

陸軍士官学校を後にし、そこから三分ほどの場所にある李さん宅へと向かう。閑静な住宅街の一角に立つ高級マンション。広々としたリビングには、趣味で集めたという白磁や青磁の品々が飾られ、格式のある落ち着いた空間をつくっている。

他のメンバーと会う約束の時間は午後六時。それまでの間李さん宅で過ごすこととなる。

李さんは一九七〇年代夫の留学先、アメリカのミシガン大学図書館で日本人によつて書かれた韓国関係の本を読み、日本人の文化水準の高さに衝撃を受けたといつ。そのことが日本に関心を持つきっかけとなり、さらには独学で日本語の勉強を始める動機ともなつたと語る。

二人の子ども、長男、長女も長じて後、文部省の奨学金を得て、日本に留学。長女は日本人と結婚し女の子にも恵まれた。次第に日本人の友人、知人も増え、今や李さんにとって日本は単に興味のある隣国から、もつとも身近で親しい国へと変わりつつある。

七〇年代、あるいは最近まで反日的であることが社会の潮流だった頃、親日的とも取れる李さんご夫妻の生き方や行動は韓国社会にあつては受け入れがたく、大変なものであつ

たろうと想像する。長年にわたってそれを貫いてこられたご夫妻に、柔軟なお人柄とはまた違うたゆまぬ信念の人といった一面を感じたのだった。

午後六時、李さん宅から他のメンバーとの打ち合わせの場所、イタリアンレストランへと向かう。ここでメンバー全員と初顔合わせに。李さんご夫妻の通訳で持参した資料、ブログラム、タイムスケージュール、立川での宿泊ホテルの説明をする。翻訳ソフトで作った資料に真剣に目を通し、確認するメンバーたち。質問や要望も出て次第に打ち解け、和やかな雰囲気が作られていく。

李さん以外は東京は初めてという方ばかり。持参したギャラリーの写真を見て東京訪問への期待が高まっていくようだ。話はやむことなく続き、レストランのウェイターが注文を取るタイミングが取れず、右往左往している。それほど皆真剣に話に集中していたのだつた。このソウルでの顔合わせによつて胸襟を開いて話し合えたという



レストランでの打ち合わせ

安堵感と高揚感を抱いて、東京へと戻る。

♪人と人のつながりは国境を越えて

いよいよ開催まで残るは三週間。ソウルでの心地よい思い出に浸る間もなく、宣伝のための準備に取り掛かる。チラシ作り、ミニコミ紙への取材要請、友人知人への協力依頼と仕事の範囲が広がっていく。

Nさんにもソウルの報告と当日の手伝い、通訳してくださる方の手配と連絡をお願いする。アサヒタウンズ紙に写真入りで大きく取り上げられ狭い会場が心配になるほどの反響だ。

こうしてむかえた二七日当日は快晴。さわやかな五月晴れである。東京での宿泊先である府中市の生涯学習センターからNさんと李さんとの友人である通訳のKさんの車で午前九時三〇分、我が家に到着。休む間もなく衣装合わせ、音楽、照明の点検、リハーサルと着々と準備が進められていく。

プログラム第一部の進行役を担当する李さんと通訳のKさんは打ち合わせに余念がない。午後一時には、ビデオ担当、受付、お茶担当のスタッフもそろい、スタンバイの体制に入る。観客も集りだし、二時の開催を前に過度な緊張と高揚感があたりを包む。

午後二時、四十名の観客を迎えて、第一部韓国舞踊が始まる。第一部が終わって第二部交流会までの休憩の時間には、お抹茶が振舞われる。スタッフのKさんを中心にしてのまにか参加者みんながお茶をたてたり、忙しい部署の手伝いにまわる。それもさりげない形で。

第二部は三つのグループにわかれ、韓國のお茶とお菓子でティー・パーティ。グループごとにハングル会話を楽しんだり、韓流スターの話や旅行の話で盛り上がっている。韓国の女性たちとカメラに納まって、ご満悦の人もいる。一時間足らずの短い時間で発言できなかつた人の不満の声もある。それだけ参加者の期待も大きかつたということだろうか。会の終りに韓国舞踊の基本所作を学び、全員で赤とんぼアリランの歌でホール交換をし交流会の幕を閉じた。心がひとつになっていく高揚感につつまれて。

韓国で文化サロンを作りたいと夢を語る李さんに、二十年近くの経験をもとに何かアドバイスをするとすれば、それは今回の交流会の体験、人と人との出会い、つながることの楽しさを感じること、そのことがヒントであると伝えたい。そして韓国の女性たちに、ステキな時間をありがとう！。カムサ・ハムニダ！と。



長編ドキュメンタリー映画
「花の夢」 -ある中国残留婦人-

監督 東 志津 制作 いせ Film

映画はガラガラと洗濯機が回る音から始まる。フィルムは主人公の栗原貞子さんが淡々と、時に涙しながら自分史を語る姿を丁寧に映し出していく。

17歳の時、満州行きを校長と村長に勧められた栗原さんは「女子義勇隊ならお国のためになれるのでは」と周囲の反対を押し切って、満州へ向かうことを決意する。しかしそうした純粋な気持ちの栗原さんを待っていたのは、満蒙開拓団の青年達との合同結婚式だった。

敗戦後の逃避行を、同じく生き残った老婆と語るシーンは凄みすら漂う。



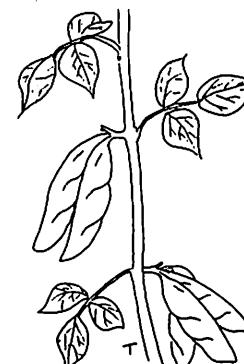
満蒙開拓女子義勇隊員の記念写真（見合い写真となる）

ソ連兵が夜ごと襲う収容所を脱走した栗原さんは、お腹の子を守るために、中国人の長勝さんと結婚する。幸い優しい人で、彼との間にも子どもが5人でき、栗原さんは貧しい中で懸命に4男2女の子どもを育て、文化大革命の大嵐にも耐えた。75年に一時帰国。長勝さんが亡くなった81年に子供達の家族全員と共に永住帰国を果たす。しかし身元引受人がいなかった為、帰国費用は全額自費。残留婦人の栗原さんに日本はとことん冷たい。「棄民ですよ。お国のためと言って行かせておいて、今度は途中どうして帰ってこなかつたと言って誰も助ける人はいない」栗原さんの言葉が重たく心に残る。

しかし、それにもまして苦難の歴史を子どもたちを守りながら、懸命に生き、祖国に帰りついだひとりの女性の大きさに打たれる。（はら）

町田 漢子

今年の枝豆は



根粒子が大事だと
いうことを知らさ
れた。豆を作ったこ
とが無い畑だった
ら、作った事のある
畑の土を混ぜると
良くな根粒子ができる
る。土を柔らかい状

態にしておくと、空気が通りやすくて、根
粒子が付きやすくなると書いてある。早速、
土寄せをした。昨年までは、この土寄せは
全くしていなかった。根粒子のことも知ら
なかつたし、全く無知すぎたのである。蒔
けば実がなると単純に信じていたのである。

今年の作付けは二十株の畑で、何をして
も1~2分で済んでしまう。だからこそ、
失敗は避けたい。毎日、近くにある諏訪神
社にお参りして祈っているので、守ってくれ
るから大丈夫だと思う。そして、梅雨明
けを待って、お日様と自然に委ねるしかな
いのだ。心配なので、追肥として有機肥料
は、胸を撫で下ろした。

もう少し知識を得なくてはと、野菜作り
がベテランの友人から「大豆の作り方」の
本を借りて熟読した。肥料よりも根に付く

の油粕を入れた、これで、もう一安心である。最後は神だのみである。

七月の末に2~3本を実の入つてそうな物を、指で押して収穫したが少し時期が早かつた。今度は食べごろの見極めが大事な仕事になつてくる。期待感が一杯である。

八月に入つて又、試食したがもう少しと言うところまできた。八月十日頃にはしつかりとした枝豆が出来ていた。三年目にして、ようやく枝豆を手にする事が出来た。食卓を囲んで皆と口にする事が出来た。甘味がある枝豆で、皆の評判も良くなつた。

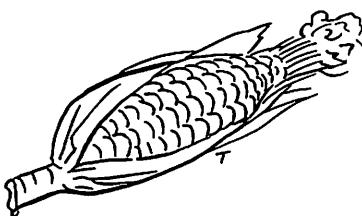
面白い勉強

今年の初物のトウモロコシを食べた日に、偶然であるが、テレビでトウモロコシの話を放送していた。私の今までの長い人生の中で、まだ知らないことが實に多いことに驚く。美味しく毎年食べていてトウモロコシだが、空に向かって伸びている穂先は雌

しへで、實の先に付いている、ひげの毛先が雄しへであることを知つたのである。それよりも、なによりも驚いたのは、トウモロコシの実はひげの本数と比例することである。ひげの数だけ實がついているのである。實の数は解るが、實の大きさまではひげは関係ないようである。

それからは、買い物に行つても、トウモロコシを見ると、ついひげの本数を数えている自分がいる。

テレビでは、石油に代わる、バイオエタノールをつくる為に、資源の奪い合いの為、関連品が値上げしている世の中であると伝えられる。地球環境を考えると、一概に反対の声も上げられないと思つた。これは、皆で考えなくてはいけない事である。



イギリス妊婦体験

原 和美



■出産は…

子どもを生んだ経験を持つ女たちが十人集まれば、十の物語がある。

早産しかかった人、逆子だった人、私のように陣痛促進剤が強く効きすぎて、大量出血した経験を持つ者、破水の有無、つわりの程度、立会った夫の狼狽ぶりなど語りだせば限りがない。そういう度もない経験なのに、その記憶はその時に立ち昇った感情もない交ぜになって、やけに鮮明に蘇ってくる。いや、経験した回数が少ないがゆえに、出産にまつわる記憶はいつまでも新鮮なままで女たちの身体に刻みつけられているというべきだろうか。

今でも三人の子どもの一人ひとりの出産時のエピソードをふいに思い出すことがある。今回テーマとした「イギリスでの妊婦体験」は私の三人目の子どもの「妊娠時」の体験だ。夫の転勤に

ともなつてイギリスで生活していた十五年も前のことだが、異国で暮らすという緊張感からか、その時感じたとまどいやつわりで不調だった時の漠とした不安、異国の妊娠システムへの好奇心、果ては健診に訪れた病院で火災報知器がなりだした時のエピソードなど取るに足りないような瑣末な事柄まで、かなりはつきりと記憶に残っている。

実際に出産したのは、日本に帰国して後、地元の総合病院でだつたのだが、日本と違う医療体制の中で一時期ではあつたものの、妊婦として過ごした日々は今でも貴重な体験として私の中にある。

ひるがえつて日本の現在の「子産み」の現場を見てみると、あまりにも寒々しいニュースが次々と報道されている。産婦人科医の不足が端緒となつて、G.N.P.世界第二位を誇るこの国でも、地方においては「安心して出産できる」場の確保が次第に困難になつてきているという。今年の九月初めには、奈良で腹痛を訴えて救急車で搬送された妊娠女性が、十ヶ所以上の医療機関で受け入れを断られ、結局は死産してしまつたという事件が起き、改めて不足する産科医療の現状に注目が集つた。「どうしたら安心できる出産の場を確保できるのか」という問いは、もはや緊急の行政課題であるばかりではなく、私たち一人ひとりを揺さぶる社会問題にもなつてきているのではないかとさえ思つ。

そう考へる時、ささやかではあるが、私がイギリスで妊婦として経験したこと、が、こうした問題を考える視野を広げてくれるのではないかという思いに駆られた。今回、至極個人的な体験記

を『自由時間』に書かせていただこうと思いつたのはそうした思いからである。かつて女たちはどういう風に子どもを産んでいたのか、また他国の女たちはどのように産んでいるのかを知ることは、現在の産科医療が抱えているさまざまな困難を解決するのに、何らかのヒントを与えてくれるのではないだらうかと考えたのだ。

ただし、残念ながら私が妊婦としてイギリスで生活したのは今から十五年も前のことで、その間には日本の制度もイギリスの制度も変わっている可能性は多いにある。しかし、この稿で私が書きたいのは、日本すでに一人の子どもを産んでいた私がイギリスという異国の出産システムに触れて感じたことや考えたことなど、多少現在の状況と異なるかもしれないが、十五年前の私の体験をそのまま書くことにしたいと思う。ありがたい(?)ことにインターネットや図書館で閲覧したお産情報を見る限り、イギリスの出産システムも日本のシステムも私の経験とそれほど大きく変わっていないようでもある。

今、手元には、「英國日本婦人会」が編集した『ロンドン暮らしのハンドブック・一九九〇年版』とイギリスの病院から渡された『ブリグナンシー・ブック（妊娠女性の手引き）』がある。これらを参考しながら、私の十五年前の妊婦生活を振り返ってみたいと思う。

■妊婦反応テストと「性の自己決定」

一九九一年五月下旬、イギリスに渡つて一ヶ月経つたころだった。なんだか眠くて堪らない。

初めは二、三日前に満喫してきた。パリ旅行の疲れだろう
ぐらいに思つていた。



自宅近くの空き地を走る子どもたち

はイギリスの生活に馴染んでいた。

そんな毎日に気をよくして、私たちは五月の下旬、娘のハーフ・ターム（学期半ばの一週間の休み）を利用して、パリに出かけた。そしてその帰り道で私は得体の知れない眠気に襲われたというわけだ。それから二、三日、子どもの世話を夫に任せてベッドの上で過ごしたのだが、体のだ

夫のイギリス勤務に伴つて、小学二年生の娘と二才の息子を連れて、ロンドンの西、四十キロ足らずの町メイデンへツドで暮らし始めていた私たちは、ようやつと現地の生活に馴染んだころだった。かなり重症だった時差ぼけも解消し、外国人登録、在留届の提出など面倒な手続きを済ませ、娘がお世話になる地元の学校の校長と面接し、医療面をサポートしてくれる「かかりつけ医」との面接も終えていた。日々の暮らしにもリズムが生まれはじめ、朝夕の娘の送り迎え、おそるおそるではあるが車を運転してのハイストリートでの買い物、現地日本人とのお付き合い、息子をベビーカーに乗せてのテムズ川への散歩など、春の陽射しが明るさを増すように私たち

るときは抜けい。そしてようやくと生理が十日以上も遅れていることに気がついたのだ。

「まさか…」

とはいいうものの、この体の重たさは尋常ではない。さつそくイギリス在住の日本人女性たちが編んだ『ロンドン暮暮らしのハンドブック』を取り出して、今まで目もくれなかつた「出産」という項目を開いてみた。このハンドブックにはイギリスの毎日の生活に必要な細々とした情報がかゆいところに手が届く親切さで、しかも暖かい手書き文字で記されている。A5版の薄い冊子だが、困つたことがあると必ず開き、また開くと必ず的確な情報が得られる心強い味方だつた。それによると、「妊娠したかな?」という時は、まず郵局で妊娠反応テストを買ってきて、自分で妊娠の有無を調べるという。そしてそれが陽性だった場合、はじめて自分の「かかりつけ医」に予約を入れることになる。

日本では、まず病院を訪れ、そこで尿検査をし、医師から妊娠を教えてもらうという手順だったので、妊娠か否かの検査を自分でするというのは少なからず驚きだつた。後日、イギリスの病院からもらった『プリグナンシー・ブック(妊娠の手引き)』によれば、妊娠反応テストは「かかりつけ医」で受けてもよいとあり、必ず自分で行わなければならないものでもないらしい。そしてその手引書には、もし「かかりつけ医」で検査すれば無料だし(イギリスでは公的な医療はすべて無料、後述)、自分で調べればプライベートに、しかも早く検査ができると両者の利点を示して選択できるような記述が付されていた。

もちろん当時の私の情報源はもっぱら『暮暮らしのハンドブック』だったので、それに従つて、

自分で検査をする方法を取つたが、「かかりつけ医」で検査してもらう人も一応はこの妊娠反応テストを済ましている人が多いらしい。

このようにイギリスと日本では医療機関に接觸を持つ第一歩の段階で、すでに少し違いがある。自分で検査してもよいイギリス式と病院で検査する事が求められる日本式、どちらにもそれぞれの歴史的背景があつてのシステムなのだろうけれど、すでに子どもを一人産んでいたにもかかわらず、「妊娠反応テスト」の試薬がどんなものかも知らなかつた私は、妊娠か否かを自分で調べられる「ことに先づ驚き、それを自分でやつてから「かかりつけ医」に診察をお願いするイギリス式に、本当に目から鱗が落ちるような衝撃を受けた。その時の気持ちを一言で言えば、「性の自己決定」というのは「こううことなのかも知れない」と腑に落ちたということであるうか。

昨今は日本でも妊娠反応テストを使って自分の妊娠を確かめてから、病院に行く人も多くなつたようだが、私の頃は圧倒的に妊娠は病院で告げられるものだつた。でもそれでは、いわゆる「性」の最後の部分を病院の医師の手に委ねてしまつことになるとも言える。もちろんイギリスの方式を知るまでの私は、病院で妊娠検査をする事に何の違和感も感じていなかつたし、むしろ「おめでたです」という医師の声を嬉々として受け止めていたのではあるが。

「これこそ『性の自己決定』ということなのだ」とイギリス式にいたく感じ入つたものの、さて、妊娠反応試薬なるものがどの店で買えるのやら、果たして私の英語力でそれが手に入れられるものやら、またその検査がどれぐらい面倒なのかも、頼みの『暮らしのハンドブック』を再三読んでみても、皆目見当がつかなかつた。けだるい体にまたぞろ不安が寄せてきた。

■アーユーハッピー

件の妊娠反応テストは、町の化粧品や雑貨類も一緒においてあるようなドラッグストアの棚ですぐに見つかった。案するより産むが易し！レジを通す時、ちょっと胸に羞恥が走ったがその程度で買った。しかも検査はいたって簡単。トイレの時、自分の尿に細長いリトマス紙のような、試薬を塗った厚紙を晒すだけ。妊娠していれば「十」が表れることになっているという。私の場合、くつきりとブルーで「十」のサインが表れてもう間違いなし。これが日本なら半日つぶれているところだろう。

イギリス式をはじめて知った時は即座に「性の自己決定」と結び付けて考えたのだが、イギリスの人たちの暮らし振りを知るにつれて、イギリス方式はそういう理念やお題目というより、プライベートを大切にし、自分でできることは、他人の手を借りずにやりたいというイギリス人気質をより濃く反映しているシステムなのではないか思うようになった。同様に、日本のやり方も戦後、アメリカ方式の病院出産が奨励されたという歴史的背景もさることながら、万全を期すまじめな国民性が背景としてあるのかも知れない。しかし自分の妊娠を自分で知ることが当たり前となつて、「性の自己決定」という言葉が内実を伴つたものになるのはなかろうか。

ブルーの「十」サインに背を押されて、私は「かかりつけ医」に電話し面接の予約を入れることにした。英語の電話はボディーランゲージが使えないとしても苦手なのであるが、こうなつては致し方ない。それが六月四日木曜日。そして私たちの担当医師であるドクター・パッチとの面

会は翌週の月曜日、六月八日九時四十分と決まった。

ここでイギリスの医療制度について少し紹介したいと思う。イギリスは公的な医療サービスはNHS（ナショナル・ヘルス・サービス）と呼ばれ、すべて無料である。薬代も風邪薬や胃腸薬など簡単なものは無料だ。しかしNHSでは飽き足らない人や、NHSだとなかなか専門医の診療を受けられないことを理由に、有料であるが、プライベートで専門医にみてもらう人もいる。ナショナル・ヘルス・サービス（NHS）は「ゆりかごから墓場まで」といわれたイギリスの手厚い社会保障を象徴するシステムではあるが、その非効率が問題となって久しい制度でもある。そのシステムの鍵となっているのは「かかりつけ医」の存在である。「かかりつけ医」は地域に何人かいて、住民は誰もが地元の「かかりつけ医」に事前に登録しておくようになっている。そして風邪を引いたり、もっと重い病気にかかたりして、何らかの医療サービスが必要な時に受診すると、その「かかりつけ医」が風邪のような軽い症状の場合は、自分で処方箋を書いて、簡単な処置をしてくれるし、もっと専門的な病院で診てもらう必要があると判断した時には、専門の病院に紹介状を書いてくれる。つまり「かかりつけ医」はナショナル・ヘルス・サービス（NHS）の入り口となっているのだ。ところが、紹介されて専門病院を受診する段階でうまく患者が裁ききれておらず、重い症状のまま、何ヶ月も待たされるという事態が常態化しているという。歴代の内閣が医療制度の改革を唱え、いろいろと手をつけてもきたが、今もって劇的に情況が好転するには至っていない。

このナショナル・ヘルス・サービス（NHS）に対比されるのが、プライベート医療である。「こちらもやはり『かかりつけ医』に紹介してもらつてから受診するのが普通だが、有料ではあってもプライベート医療は、待機期間がNHSに比べて短かく、しかも担当医が変わらないなどの利点があり、お金に余裕がある場合はプライベートを利用する人も多い。

こうした大きな問題を抱えたイギリスの医療制度であるが、それでもすべて無料というのも、なんにすがすがしいものかと実感したのも事実である。もちろん幸いにして大きな病気をして、専門病院を受診する「かかりつけ医」などがなかつたが故の感想かもしれないが、風邪を引いた時など薬をもらつて、すぐに帰れる気持ち良さは支払いのために待たなくて済むだけでもありがたいと思つた。また「かかりつけ医」の診療所はその地域の予防医学の中核となつており、そこから「ヘルス・ビジター」と呼ばれる訪問保健師が、必要に応じて各家庭を回つて健康相談に応じてくれるほか、予防接種や、出産時のケアなどきめ細かく住民の健康面をサポートしてくれている。おかげで我が家の中も、日本ではいい加減にしか受けていなかつた予防接種を、「かかりつけ医」の看護婦たちがしっかりと予定を立ててくれて、次々と接種してもらうことができた。

さて、六月八日「かかりつけ医」との面接日。私は多少緊張しながら、『暮らしのハンドブック』と辞書を片手に、もう一方の手には一才の息子の手をしつかり握つて診療所に向ひた。診療所といつても、予約制なので待つてゐる人は少ない。壁面がbrooklynガラスの明るいロビーに、

座り心地の良いモダンなデザインの長ソファーが配置されている。片隅には子ども用にレゴや木馬が置かれていて、息子の日はすぐに釘付けになつた。

受付の年配の女性に名前を告げて待つていると、すぐに呼ばれた。受付横の通路を通りて中に入ると、しつかりとした木製のドアが二つ並んでいた。告げられた番号のドアをノックして中に入ると、六畳ほどのスペースがあつて、片隅にベッドが置かれている。私の「かかりつけ医」ドクター・パッチは机に向かつてカルテを書いていた。ここでは医師といつても白衣を着ているわけではない。さつくりとした生地のジャケットとネクタイ姿のパッチ氏は、机に置かれた聴診器と血圧計がなければ、大学の先生といった趣である。もちろん完全な個室である。

おもむろに私に向か合つた彼に来意を告げると、いくつか基礎的な質問、たとえば最後の生理はいつからいつまでかというような質問をしてカルテに記録していた彼は、ペンを手から話すとまつすぐに私の方を見つめて、「アー・ユー・ハッピー？」と質問してきた。つまり妊娠を受け入れるかどうかを問うてきたのだ。妊娠してうれしいですか？」と日本で問われた経験がなかつたために、この質問はまたちよと私をまごつかせた。正直に言うと「そんなこと決まっているじやない」と憤慨しそうにもなつた。しかし考えてみれば、妊娠は新しい命の誕生に向かう第一歩ではあつても、もちろん望まない場合もあるし、想定外の妊娠で心が動搖している時もあるだろう。そうした悩みや不安な気持ち、場合によつては中絶の希望までも口にできる場がイギリスでは用意されているということなのだ。しかもこんなにシンプルな言葉で。

「イエス」という私の答えを「オーライ」と受け止めた彼は、はじめて妊娠中の健診の進み方

やいくつかの産科病院の紹介、「かかりつけ医」を女性医師に替える」とができるという説明を始めた。

ちなみにイギリスで中絶が合法化されるのは一九六七年である。一〇〇四年のヴェネツィア映画祭で金獅子賞を受賞した映画『ヴェラ・ドレイク』は、イギリスで中絶が禁止されていた一九五〇年代を背景に、善意から中絶に手を貸していた女性の悲劇を描いて大いに論議を巻き起こしたが、イギリス国教会が多数派であるイギリスでは、中絶に対する拒絶感はそれほど強くないようと思われた。それに引き換えフランスやアイルランドなどカソリックの国々での中絶への嫌悪感は根強い。フランスで中絶が合法化されるのは一九七五年（このときも五年の期限付であった）、アイルランドでは更に遅く、一九九六年であった。またアメリカも保守系プロテスタンントは中絶禁止の立場を取つており、サウスダコタ州で二〇〇六年に「中絶禁止法」が成立したり、大統領候補者の中絶に関する考え方が有権者の支持を左右するなど、中絶をめぐる論争は激しい。

さて、「アーユーハッピー？」という問い合わせ日本の病院で投げかけられたことのなかつた私は彼我の違いをここでも実感することになったのだが、考えてみると、上の子たちの時に通院した病院はどちらも公立病院であつたせいか、診察室自体がすでに患者のプライバシーに配慮するつくりになつていなかつた。広い診察室に看護婦や患者がひつきりなしに出入りし、うしろで順番待ちをしているような有様では、医師も患者もプライベートな話は出しにくい。

その日のドクターとの面会はそれだけで、内診はおろか血液検査もなかつた。私は次までに決めてくるようにと言われた産科病院の名前を記した紙をもらつて、受付で予約を取つて帰ることになつた。次の診察日は四週間後の七月一日。もちろん費用はからなかつた。

■助産師が活躍

六月の半ば頃からつわりが始まつた。せつかくヨーロッパが一番美しく輝いている季節だといふのに、遠出は無理。それどころか毎朝起きるたびに、先ず鼻先に香水をシュッと一吹きしないと、気持ちが悪くて萎えそうな感じだ。あーあ。そうは言つてもせつかくの異国での日々だ。体調を見ながら週末は高速道路でいろいろなところに出かけていたし、近場には毎日出歩いていた。やはり三人目の余裕だろうか。

「かかりつけ医」との面会日である七月一日（十週目）、私は家から近い方の病院に決めて、一月ぶりにドクター・パッチに会つた。彼が私の希望した病院に予約する手続きをとつてくれるらしい。一週間ほどしたら、病院から診察日が指定されて、手紙で届くから、その日に病院に行くようになるとされる。そしてこれからは「かかりつけ医」と「助産師（ミッド・ワイフ）」が交互にあなたの健診をするから、来週はミッド・ワイフに会つてほしいと付け加えた。この日の健診？はそれで終りとなつた。

しかしまだミッドワイフに会わなければならないと告げられて、気持ちが重くなる。拙い英語でやつとドクターとコミュニケーションが取れるようになったというのに、やれやれという気分だ。とりあえず、翌週に助産師と会う予約を入れたが、ただでさえ気分がよくない時に、次々と新しい人と面会しなくてはならないのはやりきれない気分だった。

翌週、助産師との面接に「かかりつけ医」の診療所まで行く。イギリスの看護師は白衣ではなくロイヤルブルーというのか、濃い青のナース服を身にまとっている。私の担当らしい助産師も少しきたびれた青の制服に着ていた。五十がらみの女性で、「私は日本のガールを何度もアシストしているから大丈夫よ」と何度も言つてくれる。「ガール」と言う言葉に違和感を感じたものの、日本人が初めてではないという彼女の言葉にいささか安堵。そして歯の治療に行つてきたばかりだから話しがうまくできなくてと謝りながら、「妊婦は出産後一年間は歯の治療が無料だから、あなたも診てもらつといいわよ」と目配せした。処置室と呼ばれるところだろうか、ナースたちが出入りするような白っぽい部屋だったよう記憶するが、助産師はゆっくりと私に対してくれた。こうした職業にありがちな押し付けがましさや多忙なそぶりが全く見られないでの、英語が不自由な私はほつとする。

ナショナル・ヘルス・サービスでの標準的な出産前健診は、初期は四週間」と、中期は三週間」と、終期は二週間に一度で「かかりつけ医」と助産師（「かかりつけ医」の診療所、病院）が

交代であった。その他に一度ほど超音波検査が入る形になっているが、診療所でも病院でも、現場をリードしているのは助産師たちだという印象を受けた。私は経験しなかつたが、実際に出産に立ち会ってくれるのも病院の助産師たちだ。

ひとつの妊娠、ひとつの命の初期から出産、その後の手当てまでを診療所を拠点に活動しているコミュニケーション助産師と産科病院内の助産師たちが途切れなく見守ってくれるというのが、イギリスの出産システムの大きな特徴のように思つた。日本でも正常なお産の場合、医師は最後に「その緒を切りにくるぐらいで、長い陣痛期間や出産を支えてくれるのは助産師である」とが多い。イギリスではそれをもつと「制度」として確立している感じなのだ。そう理解して初めて、私は今回のミッド・ワイフとの面接の意味も、彼女がきちんと私に向き合つてくれた態度にも納得がいったのだ。また同じイギリスでもプライベートは、妊娠から出産まで同じ担当医が健診、診察をしてくれるらしく、より日本に近い態勢といえるかもしれない。

もうひとつ日本と大きく違うと感じたのは、健診での内診がほとんどないことである。体重を量り、時には血液検査もあるが、内診は正常であればほとんど行われないようだ。もちろん私が体験したナショナル・ヘルス・サービスでの話であるが、日本で行われる血圧や腹囲、子宮底長の計測もなかつた。インターネットを閲覧してみると、出産間際の診察で子宮底長を初めて計つてくれたと書いていたものに出会つたが、それぐらいまで子宮底長も計らないということだらう。つまり超音波検査以外はベッドに横になることがほとんどないまま、出産を迎えることができる。

もちろん異常がない場合に限られるのだろうが、きちんと計測や内診をして常に異常がないか見ていく日本と、何か異常があれば対応するが、後は自然に生活していく方を優先するイギリスと両国の国民性の違いのようなものをまたここでも感じることができるのではないだろうか。

■フルタイム・マザー

医師が紹介してくれた病院から診察日が郵送されてきた。私の診察日は七月二二日。といつても最初の診察日は、その病院で産むための手続きや諸検査をする事になつてるので、面会日といつたほうが適切かもしれない。受付に差し出すカードと尿検査のサンプルを持って、車で三十分ほどのウイクザム病院に、地図をたよりに出発した。上の娘もその日から夏休みになつていたので、夫に休みを取つてもらい、その日は子どもたちを夫に預けて出かけた。

「じんまりとした「かかりつけ医」の診療所と違つて、ウイクザム病院が大きな近代的な建築物である」とまず驚く。古色蒼然としたレンガづくりの建物を想像していたのだが、とんでもなく現代的なビルだった。車の出入り口も四ヵ所あつて、迷う。ぐるりと周囲を一周してから、駐車場に車を入れる。病院内に入るとロビーも広く、多くの人で混雑している。とりあえず受付でカードと尿サンプルを提出してロビーのソファーアで待つていると驚いたことに、「かかりつけ医」で私の担当になつた助産師が人ごみを分けてやってくれた。

イギリスのシステムがよく呑み込めていないうらしい「外国人女性」を援助してくれようとした

のかもしれない。彼女はよく病院にも来ているのだと話して、待合室が混んで私の手続きが進んでいないのを知ると、私を別室に招き、必要な記録カードの作成に取り掛かつてくれた。そのカードには妊娠した本人の個人的な事柄を書き込むことになつていていたらしい。名前、住所、年齢、職業、他の子どもの有無、病歴、親の病歴などの他に、宗教、国籍など日本ではおおよそ尋ねられないような項目まである。「英語のレベル」という項目もあり、私は「フェア」と評された。常々言葉のハンディは嫌というほど感じていたので、意外な表情をすると、「私たちがゆっくり話せばあなたは理解できるし、あなたの英語も私たちは理解できる、だからあなたの英語はフェア・イングリッシュよ」と言つてにつっこり微笑んでくれた。「職業」についても、専業主婦の私が「ノースジョブ」と答えると、「ではあなたはフルタイム・マザーね。それはナイスジョブよ」と言つて私に「職業」をくれ、記録にもフルタイム・マザーと書き込んでいった。

『プリグナンシーブック（妊娠の手引き）』を読むと、妊婦の体のケアと共に、同じぐらいの分量が心のケアに割かれている。そして辛い時や落ち込んだ時は遠慮なく相談すること、何かでイライラしたとしてもあなたが悪いわけではないとくりかえし書かれている。助産師が私の英語をフェアと評し、フルタイムマザーと私の職業を記入してくれた態度にも、同じように妊娠女性を精神的に支えようとする社会全体の暖かさが感じられて、私はうれしかった。助産師が医師と共に出産をトータルにケアする過程には、そうした助産師ならではの心理面のサポートが期待されてもいるのだろう。

その後、助産師が話をつけてくれて、いよいよドクターに面接することになった。ドクターは男性、白人とイメージしていたら、面接してくれたドクターは小柄なアジア系のシスターだった。黒い修道服の上に水色のエプロンというスタイルで現れた彼女は、木製の重厚な机の前に腰を下ろすと、私の記録と私を見比べていたのだが、私が外国人のせいか、病院の若い助産師がシスターに私の説明をしてくれた。驚いたことに、その助産師は私の説明をシスターの机にどんと腰を乗せて話しだしたのだ。日本ではありえない光景だろう。ちょっと度肝を抜かれた私は何を聞かれたのかあまり覚えていないが、私のほうからは出産は帰国してからになるかもしれないことを告げて、初めての病院訪問は終わった。

いや、最後にもう一つ、ロビーで帰りの手続きをして待っている時に、産科病棟で火災報知器が鳴り出すというハプニングがあった。私もみんなと一緒に外に出されて、構内的一角に集められたが、みんな誤作動と分つてているのが、リラックスして冗談を言い合つていて。と、ひとり遅れて先ほど会ったシスターが「何てこと、子どもを取り上げている最中だつたのに」と言いながら飛び出してきて、みんな大爆笑になつた。五分ほどして消防車が到着。みんなやんやの大騒ぎでこれを迎えると、消防士の方も心得たものでサイレンを鳴らしてみたり、手を振つたりの大サービス、大いに盛り上がつたハプニングであった。

■アクティブ・ベース

『プリグナンシー・ブック』には、病院でのお産の他に、スタッフや設備が整つていれば自宅近くの「かかりつけ医」でのお産や自宅でのお産も可能であると書いてある。また、病院によつては水中出産のプールや無痛分娩などが可能な施設が整つており、病院で産む場合であつても、出産スタイルは日本よりはるかに選択肢が多い。たとえば、ウイクザムの説明書には、分娩室では自由な姿勢を取つてよく、部屋や病院内を歩いてもよいし、テレビを見ていても音楽を聴いていてもよいとある。また電子レンジもあるのでちょっととしたスナックやお茶を飲むこともできる。もちろんパートナーや誰か連れが同室でもなんら問題ないし、むしろ推奨されている。いざ産む時も安全な態勢であれば、どういう態勢でもよいらしい。もちろん正常なお産に限られることだが、このような出産スタイルは「アクティブ・ベース」と言われ、英国で始められ、今は日本の助産院でも取り入れられてきている。（「助産師と産む」岩波ブックレット）

また痛みを逃がすためのガス＆酸素吸入や無痛分娩も同時に用意されていて、医療的なケアと自然なケアの両者を妊婦は自在に組み合わせ、自分らしい出産を計画することができる。妊娠後期には、どういう出産が良いか綿密に助産婦との打ち合わせが予定されているし、出産中、痛みがひどくて正常分娩から無痛分娩に変えたいという希望も可能な限り実現できる。イギリスでは妊婦は日本よりずっとわがままにお産ができるという印象を受けた。

当の妊婦たちはお産をどういう風に思つていいのだろう。直接的に話を聞く機会がなかつたのでわからないが、『プリグナンシー・ブック』には、パートナーに腰をさすつてもらつたり、額

の汗をぬぐつてもらいながら下半身をあらわにして、助産婦や家族と談笑する妊娠婦たちの写真が載っている。驚いたことに、出産場面も子宮が全開となるところから、頭が出てきたところ、生まれる瞬間、へその緒でつながつたままの生まれたての子どもを抱く場面まで、写真がばかさることもなくきちんと掲載されている。日本では女性の下半身や出産場面は顕わな写真ではなく、絵か何かで表現されることが多いので、初めて見た時は驚いたが、イギリスの女性たちの「産む」という行為に対する心意気のようなものを感じて、エールを送りたくなったのを覚えている。

出産のための入院期間は正常ならば二日間ほどらしく、日本と比べて短い。しかし担当の助産師が十日間は毎日自宅を訪問してくれて、傷の手当をしたり、さまざまな相談に乗ってくれるようになっている。まだ子どもが小さかつた私には、二日間で退院できるというイギリス式がとても魅力的に感じられた。が、至れり尽くせりの日本の病院にも慣れていたので、入院期間があまりに短いことに不安を感じたのも事実である。残念ながらイギリスでの出産は体験できなかつたが、実際はどういう感じなのだろうか。



「プリグナンシー・ブック(妊娠の手引き)」

八月に入るとすっかり気分が良くなり、香水のお世話にならずに済むようになつた。そうなるともう出かけたくなり、湖水地方などに三泊四日ほどの旅行に繰り出すようになつた。健診の方は三週間に一度の頻度になつてきたが、相変わらず面談と体重測定ぐらいで終了。しかし、九月に入ると、ウイクザムの病院から超音波検査の呼び出しがあつた。

指定された日に下の一才の息子を伴つて出かけた。検査技師は若い女性だつたが、検査のために私がベッドに横になると、不安そうに側に立つていた息子に目を向けた。「息子のこととは、あとから世話をしますから」と少しでも早く検査を済ませたくて、私は言つてみたのだが、彼女は検査を途中でやめると、「一からともなく、おもちやを取り出してきて息子の前におき、再び検査に取り掛かつたのである。超音波検査自体は日本と同じもので、特別の興味は持たなかつたのだが、この若い検査技師が息子に示してくれた好意が心に残つた。

イギリスで生活しているとき、子どもへの視線が日本よりも暖かいと感じることが多い。渡英当初バッキンガム宮殿を見物していたら見知らぬ女性が（それも若い）二才の息子を肩車してくれて、衛兵の交代を見物させてくれたし、ある時は走つて転んだ息子を「ビッグ・ボーイ」と庭から老人が飛び出してきて抱きおこしてくれた。ベビーカーを押していれば、ショッピングの入口は誰かしらが戸を開けて待つてくれる。若い男の子の時もあれば、年配の女性が再度戻つて、私たちのために待つていてくれる時もあつた。そうした風土がイギリスにはあるのだ。

イギリスばかりではなく、フランスでもスペインでも、子どもをつれて歩いていて「得をした



帰国直前にイギリスの家の前で記念写真

な」と感じることが多かつた。フランスでベビーカーを横においてちょっとした階段の前で立っていると、何人の男性が身振りで運んでやろうかと声を掛けてくれた（外国の中年のおばさんに！）、ルーブル美術館では長蛇の列を尻目に、ベビーカーを押している私たちを係員が呼んで、ガラスのピラミッド内をくるくるまわるエレベーターに案内してくれ、優先的に中に入ることができた。スペインでも皆子ども好きらしく、二人の子どもたちはいろんなところで声をかけられた。そうした社会全体の余裕のようなものが、妊娠中も子育てをしている時も親たちへの大きな励ましになつてているのは間違いない。

結局私は十一月の末に帰国。ミッドワイフは「日本で、いい子を産んでね」と笑顔で送つてくれた。そして帰国の荷解きがひと段落着いた十二月一日に、私は地元の公立病院に診察を受けに行つた。固い長椅子で息子の相手をしながら、待つこと数時間、内診、計測、血液検査など型どおり。半日がかりで支払いを済ませて帰るときには息子とともにくたくたにくたびれてしまつた。妊婦をこんなに待たせるなんてと、あまりにイギリスト違う日本のやり方にうつ憤のやり場もなかつた。それでも言葉が通じる心地よさは格別で、長く待たされることにも、

健診のたびに内診があることにしんどいに慣れて、なんら違和感を感じなくなつた。体を預ければ済む日本の産婦人科も慣れてしまえばこれほど楽なことはない。しかも出産の時は、病院に着いてすぐに分娩室入りし、医者を呼ぶ暇がないほどほどの慌しさ、これではいろいろとお産をデザインしていくも役に立たなかつただろう。そしてこれまた型どおり、五日間入院して退院した。

■「お産難民」と「飛び込み出産」

再度、今のお産の現状が気になつて、いろいろと情報を集めてみた。すると、今の出産現場がさまざまな問題に直面しており、そのいくつかはほとんど瓦解寸前といつていいほどであることに戦慄を覚えた。中でも大きな問題のひとつは、やはり産婦人科医の不足に伴う「お産難民」の問題であろう。

確かに産婦人科医の不足は深刻で、たとえば山梨県では分娩可能な医療機関がここ十年に半分以下の十七ヶ所になり、しかもうち九ヶ所が甲府市内に集中していると言う（毎日新聞十一月二一日）。県は窮余の策として、助産師外来の検討に入つたが、その助産師の充足率も全国最低レベルで、言わば八方塞の状況にある。こうした「お産難民」の問題を持つ県が今、全国に広がっている。それは取りも直さず、子どもを産むという「く」自然な営みやそれに伴う喜びを人々から奪い、社会の継続性すら危うくさせる。

『助産師と産む』（岩波ブックレット）では、戦前の日本の産婆や現在の自然なお産を支える

助産師の存在を紹介し、今の産婦人科医の不足や病院出産での満足度の低さを乗り越えるには助産師の活用が決め手だとする。助産師がいきいきと活躍していたイギリスの出産システムを体験してきた私にとっては我が意を得たりの論であるのだが、それが単に医師の不足を理由としてのみ押し進められていくなら、やはりいろいろな問題がでてくるようと思われる。たとえば、助産師の過失は誰が責任を負うのか、また医師との連携はどうあるべきか、責任を持つてお産を主導できる助産師の養成はどうするのが、そしてその待遇はどうするがなど論点はさまざまにあるし、助産師を最大限に活用するには、出産システム自体を医師中心のものから、より助産師が動きやすいものに再構築し直さなくてはならないだろう。また女性たちも医療に過度に依存するのではなく、医師や助産師の手を借りながらも、より主体的に自身の出産に臨む必要があると思う。

またもうひとつ、現在の出産現場の問題点として、その経済的負担が大きいことがあげられる。冒頭で触れた奈良で起こった妊娠女性の「たらいまわし」も、本人が未健診だったことが災いした。こうした未健診の妊婦がこのところ増加しているという。(朝日新聞十一月一八日) その背景には経済的な困難があるというが、調べてみると出産に掛かる費用負担は若い世代にとって相当に大きい。たとえば、二年前、立川の個人病院で健診を受け、出産は地方の親元でしたという女性の場合、健診の費用は、初回がいくつかの検査があつて一万五千円ぐらい、二回以降は五千円から一万円だったという。そういう健診が二三週までは月一度、一四週から三五週まで月に二度、最後は毎週予定されており、合計十四回ぐらいの健診(厚生労働省)が望ましいとされ、相

当な負担額になる。

その上、入院費用も高い。先ほどの女性は地方の病院で、出産で入院した折に四十万ぐらい支払った。だいたい公立病院は四十万ぐらいが相場であるが、もちろんお産が夜間になつたり休日になると割増料金が加算される。当然のことながら、私立病院はもっと費用負担が大きい。電話で尋ねた病院では五八万五千円以上という答えだった。無痛分娩などさまざまなオプションをつければ、さらに費用がかさんでしまうことになるだろう。

これに対して「出産一時金」として健康保険や国民健康保険から支給されるのは三五万円である。中には自治体や健康保険組合が独自の付加金をプラスするところもあるが、それでも健診費や新生児の準備をまかなえる額ではない。イギリスのように無料とは言わないまでも、公的な機関は、もう少し安心して健診や出産ができるよう経済面でサポートしていくないと少子化問題も「飛び込み出産」といわれる未健診のまま出産するケースも解決されない。イギリスでは出産に要する入院期間が二日間と短かつたが、そういった費用負担が少なくて済む方策もこれまでの慣例にこだわらず摸索していく必要があるのでないだろうか。

妊娠、出産を支えることはその国の永続性を保障していくことになる。イギリスのみならず他の国の中産システムも参考しながら、低負担で女たちが自分の出産体験を幸福に振り返ることができるような妊娠・出産のシステムを作つていってほしいと思う。

【参考】「助産師と産む」 岩波ブックレット

あとがきにかえて

座談会

歴史の必然から生まれた
通信性中学

通信性中学

草場 Tさんを通じて、通信制の中
学の存在を初めて知つて、驚いて話
を伺つたり調べていく中で、学校教
育法に規定されている制度であり、
歴史の必然性の中で生まれてこざる
をえなかつたものだと思いました。
だから今回、通信制中学をテーマ
にしたのですが、どうしてもTさん
の歩んできた個人史、意識するとし
ないに閑らす歴史の真ん中を歩いて
きた彼のあゆみそのものを書かない
わけにはいかなくなりました。

Tさんの話を聞きながら、民衆の
歴史というものはこういうものなの
だなと思いました。

原 Tさんはラジオで通信制中学の
存在を知つたのですよね。

草場 大沢悠里の「ゆうゆうワイド」
で取り上げていたのを聞いたのです。
通信制中学については、杉並の広
報に載つていたり、学校自身も独自
ポスターを出していたりするのです
が、やはり広く知られているという
わけではないですね。

原 対象者は尋常小学校初等科卒業
の人だけですか?今、不登校で義務
教育の中学課程を終えていない子も
出てきています。そういう子の受け
皿にもよいと思いますが…。

吉澤 通信制中学もその選択肢の一
つとして開かれていくべきのでは
ないでしょうか。若い人が老人とい
つしょに学ぶ意義はとても大きいし、
そう考えれば今日的な意味はむしろ
増していると思いますよ。

草場 今まで現行制度での義務教育未終了
者で学齢を超過した者の一文もあります
し、実際Tさんたちといっし
ょに学んだ若い人も一人いたとのこ
とです。しかし、基本的には義務教
育が新制中学までとなつた際の救済
策です。

町田 不登校で人と会うのさえ苦痛
な子は夜間中学より通信制中学の方
が合うのではないかでしょう。東京
と大阪に一校ずつしかないというの
は、少なすぎる気がします。

草場 不登校者が中学の修了証書を
手に入れるには、保健室登校、フリ
ースクールに通いながら時々学校に
行く、認定試験をクリアするなどの
方法があります。

吉澤 通信制中学もその選択肢の一
つとして開かれていくべきのでは
ないでしょうか。若い人が老人とい
つしょに学ぶ意義はとても大きいし、
そう考えれば今日的な意味はむしろ
増していると思いますよ。

草場 今まで現行制度での義務教育未終了
者で学齢を超過した者の一文もあります
し、実際Tさんたちといっし
ょに学んだ若い人も一人いたとのこ
とです。しかし、基本的には義務教
育が新制中学までとなつた際の救済
策です。

向で条件整備されるとよいですね。

かと思うのですね。

【環境立国】ドイツの夜は暗い

吉澤 私は2つのテーマで書きまし

た。ひとつは韓国との交流です。韓国についてはこれまで書いてきたのですが、今回は向こうから日本に来ていただいた報告です。ささやかな民間交流ですがこうした交流が両国の理解を真に進めていくものだと実感するのですね。

原 私もその会に参加していました。韓国の人たちのオープンで、「だわりのない態度に驚きました。

・91・

吉澤 仲介してくれた李さんの性格もありますが、文化的にも経済的にも両国に落差がなくなってきていて、お互いが対等に付き合えるようになってきているのかもしれません。だからこそなおさら、こうした膝を交えるような交流が大切なではない

た。ひとつは韓国との交流です。韓国についてはこれまで書いてきたのですが、今回は向こうから日本に来ていただいた報告です。ささやかな民間交流ですがこうした交流が両国の理解を真に進めていくものだと実感するのですね。

原 私もその会に参加していました。韓国の人たちのオープンで、「だわりのない態度に驚きました。

吉澤 仲介してくれた李さんの性格もありますが、文化的にも経済的にも両国に落差がなくなってきていて、お互いが対等に付き合えるようになってきているのかもしれません。だからこそなおさら、こうした膝を交えるような交流が大切なではない

原 私もその会に参加していました。韓国の人たちのオープンで、「だわりのない態度に驚きました。

吉澤 仲介してくれた李さんの性格もありますが、文化的にも経済的にも両国に落差がなくなってきていて、お互いが対等に付き合えるようになってきているのかもしれません。だからこそなおさら、こうした膝を交えるような交流が大切なではない

原 私もその会に参加していました。韓国の人たちのオープンで、「だわりのない態度に驚きました。

吉澤 仲介してくれた李さんの性格もありますが、文化的にも経済的にも両国に落差がなくなってきていて、お互いが対等に付き合えるようになってきているのかもしれません。だからこそなおさら、こうした膝を交えるような交流が大切なではない

原 私もその会に参加していました。韓国の人たちのオープンで、「だわりのない態度に驚きました。

・91・

上げるようになつてからだそうです。
草場 三十年近くも知らされていな
かつたということですね。

統一後のドイツが抱える問題

吉澤 ベルリンを案内してくれたベ
アテさんは東ドイツの出身ですが、
東西ドイツが統一される前は、貧し

かつたけれど皆が同じで、地域共同
体の中でそれなりに生活していたと
話していました。ところが、統一後
はすべて西のやり方になり、競争原
理も入ってくるし、何もよいことが
ないと感じている人も相当数います。
東西ドイツが統一される前は、貧し

は親切なベアテさんもベトナム移民
には厳しい目を向けていました。
草場 そんなに移民を受け入れてい
るのですか。

吉澤 以前から移民は受け入れてい
たのですが、統一などで不況になる
とドイツの人たちにとって仕事を
奪い合う競争相手と映るようになつ
たということです。

東ドイツの人たちの不満について
話しましたが、西ドイツの人たちに
とっても、東ドイツを抱えることは
かなりの負担です。東ドイツはイン
フラも未整備だし、資本主義のルー
ルにも不慣れです。それが西の東を
見る差別的な目になつているのです。

原 森鷗外記念館については?
吉澤 フンボルト大学に付属した建
物で、一九八四年に、鷗外渡独百年
を記念して作ったそうです。提案し
たのは日本人だそうですが、それに
してもよく残してくれました。

もうひとつ大きな国内問題となっ
ているのが移民問題です。私たちに
してはよく残してくれました。

町田 鳴外は十九歳で医学部を卒業
しています。やはりすごいですね。
吉澤 鳴外は漱石と同じように公費
で留学しますが、物価の関係か軍派
遣だつたせいか、漱石とは違つて、
華やかな留学生活を送り、ドイツを
満喫しました。何よりも日本では得
られないかった自由を味わいました。

在日の住職と立川基地との縁

町田 私は朝鮮戦争でなくなつた在
日義勇軍兵士とその慰靈を引き受け
ていたお寺を主題にしました。しか
し、これまで特に韓国に関心を持つ
てきたわけでもないので、なかなか
自分に引き寄せられないテーマだつ
たように思います。でも書いている
うちに、大行寺の前の住職さんの生
き方に魅かれて、どちらかといえば
義勇軍兵士というより、彼の生き方
に主眼を置いた原稿になりました。

原 義勇軍兵士については話を聞け
る人が少なかつたのですよね。

吉澤 在日の人方がお寺の住職になる
というのは、どういうことだろうと
思いますから、裕尊氏に焦点を当て
たのはよかつたと思います。

もともと私たちの活動は飛行場に
よつて立川はどのように変わつたか
を女性の視点から見てみる活動だつ
たわけですから、立川基地から遺骨
が運ばれたというような話は、その
知られざる1ページとして貴重です。

しかもそれが大学の同級生のお寺
と関係があつたなんて、縁というか
不思議な結びつきを感じました。

出産という行為は同じだけれど

原 イギリスでの体験をちょっとブ
ログ風に綴つてみました。実は今回
のテーマで書くに当たつて、日本の本
出産費用も調べてみたのですが、そ

の高さに驚きました。奈良などで起
きた搬送受け入れ拒否も、被害者は
未受診だった人が多いといわれてい
ます。その背景には高い健診費用や
出産費用があると思います。

吉澤 出産費用はある程度補助があ
つて返りますが、幾度も掛かる
健診費用や出産準備の買い物は、若
い世帯には負担が大きいですね。

原 その点イギリスはお金が要らな
くて本当に楽でした。初めはありが
たいと思っていたのに、そのうちそ
れが当たり前になつてしまつて。
吉澤 いろいろと問題はあるのでし
ょうが、最低限度を保障するイギリ
スの医療制度は安心感があります。

町田 産院選びは費用もありますが、
食事で決める人もいます。

原 フルコースが出たり、出産がイ
ベント化しているという感じは受け
ます。でも、それはイギリスも同じ
かもしれません。どんな風に産むか

選択できるので、水中出産とか自分
の出産をデザインするようです。

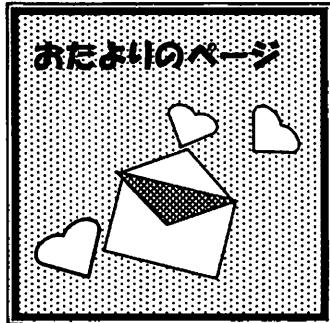
またこうした出産や健診の場で、
イギリスでは実に助産師たちがその
力を発揮しているのですね。日本は
戦後、病院で医師の手を借りながら
産むというのが圧倒的多数になつて
しまいましたが、医師不足が伝えら
れる現在、もっと助産師の活用を計
つたらと思いました。

吉澤 イギリスでは中絶はどうなつ
ているの？

原 ヨーロッパの国々では割合早く
認められた方ですが、實際はどうい
う手順で進んでいくのかは、私には
分りませんでした。

町田 妊娠試薬のことが出できます
が、今は当たり前のようですよ。

原 では私が感じた性の自己決定
が日本でも進んできたということを
しようか。少なくとも診察に行く前
にいろいろ考えておけますものね。



おたよりのページ

- 歴史の認識が、深く、広く、優しく感じられるようになりました。
(Pさん)
- 中国を身近に感じていただきたくうれしいです。母に読んで聞かせたいと思っています。
(Kさん)
- 一気に読みました。「天水に開く花」、憎しみの連鎖をどのようにのりこえるかが問われていると思いました。国と国

(一部抜粋)

との友好関係はひどく脆いもので。人間としてのつながりこそが新しい絆になりうるのだとの思いを強くしました。「韓国訪問記」も興味深く読ませていただきました。北朝鮮が頑なに自國を守ろうとするのはある意味当然と考えます。私たちの国の責任は何一つ果たされていません。拉致を言うなら強制連行、従軍慰安婦にも触れるべきなのに、日本のメディアは沈黙するばかりです。
(Kさん)

●「自由時間」ありがとうございます。中国語をいつございました。中国語をいつしよに学ぶ友達にも読んでもらいたいと思います。今、高校のPTAのお母さんと担任だつた日本史の先生といつしょに戦争や日本社会について勉強する会ができそうです。そのメンバーにも読んでもらいたいと思います。
(Mさん)

●さて、「自由時間」、回を重ねるごとに、方向性がクッキリ出てきました。特に座談会では皆さんの価値観とか、政治に求めるモノがハッキリ出ています。ふだんの会話では、政治や教育改革といった、大きな話題を振らないようにしている私にはすこしギャップもあります。
(Yさん)

●このように継続して自分たちの表現をし続けていくということはすごいことですね。毎回取り急ぎのことに割り込まれながら、楽しみに時間をかけて少しづつ読ませていただいています。
(Aさん)

つむぐの会

2007年12月15日発行（額価600円）